偶評明治新體詩歌選

YEIRI.

從七位陸軍中尉大庭君題辭

備後磊々庵居士編纂

明治二十年
第四月刊行

津田氏發兌

茂在父郎

同恠木林父閑下

閑下

茂在

茂在

茂齋

偶評 明治新體詩歌選

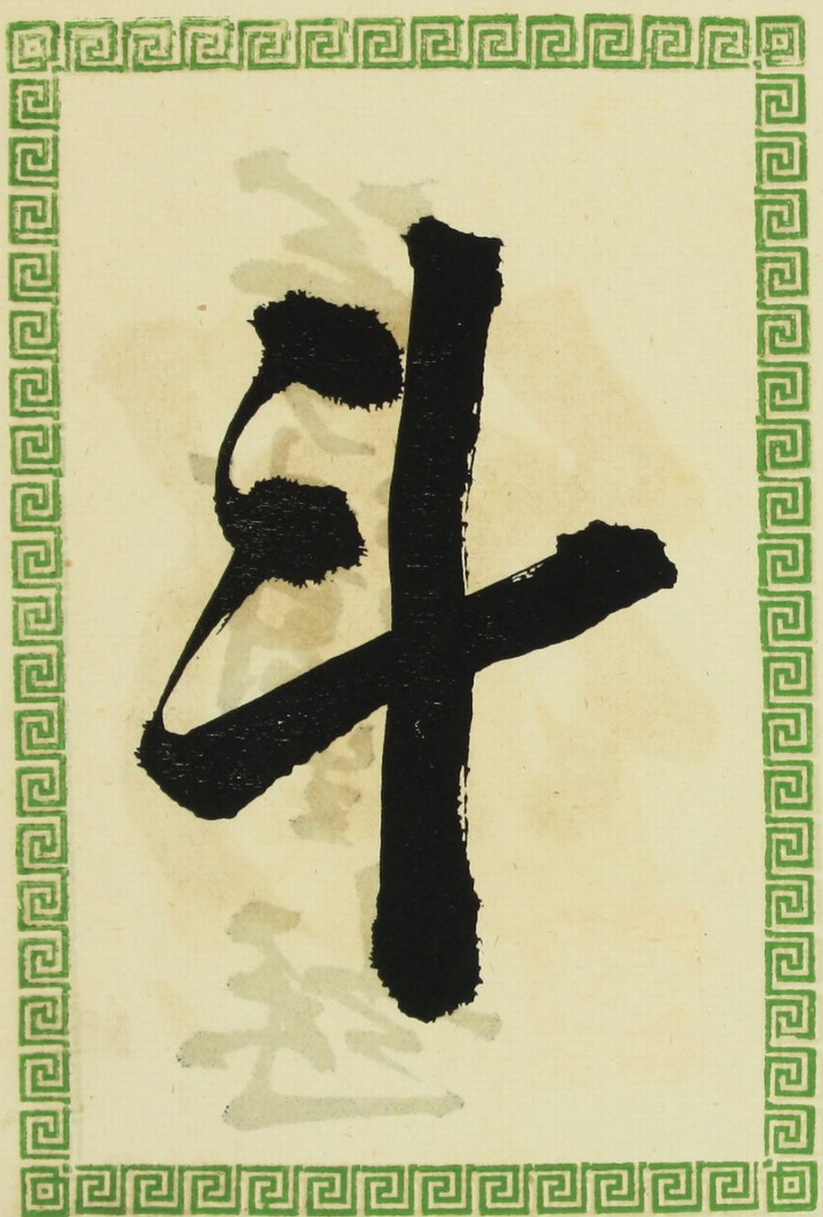
YEIRI.

從七位陸軍中尉大庭君題辭

備後碌々庵居士編纂

明治二十年第四月刊行

津田氏發兌



等域生題

行軍ノ圖

緒言

一本書ハ當時人ノ專ラ頌謠欣和スル玉句錦章「但シ居士ノ鈍作ヲ除ク」ノ新体詩ヲ編輯セシモノナリ

一本書ハ最モ兵士ノ奬勵楠氏ノ頌賛及ビ勸學教訓ニ係ル篇ヲ數多トス蓋シ本書編輯ノ由テ基スル所ナレハナリ

一本書編輯方急需匆々ノ際ナレバ固ヨリ之レカ評語モ亦匆々ノ罪ヲ免カレズ又作者ノ住号ヲ漫然ニ歸スル者數首アリ讀者幸ニ併セテ諒セヨ焉

明治廿年三月下浣

碌々庵居士識

新体詩歌選目次

西詩和譯　坪井正五郎十一
外交の歌　屈山居士十一
春夏秋冬の詩　尚今居士十二
進軍歌　姓不詳十四
行軍歌　姓不詳十五
ロングフェルロー氏兒童の歌　尚今居士十六
寄隱君子　碌々庵居士十九
自由の歌　小室屈山二十一
チヤールス、キングスレー氏の悲歌　丶山仙士二十五
擬代悲白歌翁詩　北溟釣史二十八

楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓の歌　姓不詳三十一
高僧ウルゼーの詩　丶山仙士三十三
シヤール、ドレアン氏春の詩　尚今居士三十五
女子を勵ます詩　一山居士三十七
童子の死を悼む詩　外賢居士三十八
ロングフェルロー氏玉の緒の歌　巽軒居士四十
少年某氏を悼む　碌々庵居士四十三
松の緑　天外處士四十六
カムプベル氏英國海軍の詩　尚今居士五十一
グレー氏墳上感懷の詩　尚今居士五十三
軍旗の歌　立見尚文六十五

援刀隊の詩
勸學の歌
客中秋夜
小楠公を詠ぜるの詩
新体詩林發行を祝す
明治丙戌除夜
女子に告ぐ
薄命の歌
ブルウムフヰールド氏兵士歸郷の詩
日本魂
テニソン氏船將の詩

、山仙史　六十八
尚今居士　七十二
訥々庵居士　七十六
姓不詳　七十七
一山居士　八十
碌々庵居士　八十三
明日香小史　八十七
扇岳逸士　九十
、山仙士　九十三
落花居士　九十八
尚今居士　百二

一月元旦
兵士の歌
西郷追慕の歌
新年小學生徒に寄す
テニソン氏輕騎隊進撃の詩
詠史
日本魂
秋の夕
復古の歌
凱戰の歌
軍歌

蘭竹居士　百七
大庭景一　百十
海舟散人　百十三
安藤新太郎　百十五
、山居士　百十七
姓不詳　百廿一
尚今居士　百廿三
百合香女史　百廿六
姓不詳　百廿八
大庭景陽　百三十
姓不詳　百卅二

鎌倉の大佛に詣て丶感あり
無題
世渡りの歌
隱子を詠して學童に寄す
寒村夜歸
社會學の原理に題す
春の眺め
送學友歸鄉詩
朝貌の花に寄せて學童を奬勵する
四時
刺客を詠ぜるの詩

尙今居士 百卅五
故久坂義助 百卅九
小川健治郎 百四十一
碌々庵居士 百四十五
小川健治郎 百四十八
丶山居士 百五十
子有樵夫 百五十九
大竹美馬 百六十
小川健次郎 百六十四
大和田建樹 百六十六
八門奇者 百六十八

シエークスピール氏ヘンリー第四世中の一段
丶山居士 百七十二
シエークスピール氏ハムレット中の一段
尙今居士 百七十六
ホーヘンリンデン戰爭ノ詩
山陰樵夫 百七十九
櫻の歌
大庭景陽 百八十三
童子勸學辭
落花居士 百八十五
小楠公決死の歌
橋本謙作 百八十八
新案いろは歌
一山居士 百九十一
護國の歌
姓不詳 百九十四
題秋(西詩和譯)
望月秋太郎 百九十八

湘南秋信　鈴木券太郎二百
案山子　碌々庵居士二百二
春の花　龍溪學人二百五
熊本籠城の歌　大庭景陽二百六
夏夜即事　小川健治郎二百九
見燭峨有感　犬山居士二百十一
ロングフェールロー氏人生の詩　丶山仙史二百十三
日本刀の歌　大庭景陽二百十七
人の東都に行を送る　楢山居士二百十九
題明治乙酉攝河州二洪水　一山居士二百二十
計七十三首

新体詩歌選目次

八

新體詩歌選

西備　碌々庵居士編輯

坪井正五郎

西詩和譯

息の出入とからだの血
しかのみならむ宜心地
清きたましひくれ命
時計のめぐり早くたち
遽に變る針の位置
歳いすぐとも業とさち
なきは則ち無能無智
多く考へ氣をたもち
よき働きを爲せる後
長しと言いんこの命ち

古今薄命の人多くハ無能無智に因る勉むべきハ學にこそ習ぶべきハ藝にこそ

井上巽軒曰、押ー韻自ー在、可レシ喜フ、又タ曰ク、學ー者日ニ誦レシ之ヲ以テ勗ハ、則チ其ノ進ー歩可ニキ期ノ而竢ツ也ナリ、

外交の歌

屈山居士

西に英吉利北に魯西亞
外表に結ぶ條約も
萬國公法ありとても
強弱肉を爭ふは
嗚呼同胞の兄弟よ
盡せやはげめ諸共に

我邦今日の
同胞兄弟よ
當さに服膺
して外侮を
禦ぐへし

春夏秋冬の詩

尙今居士

春は物事よろこばし
庭の櫻や桃のはな
野邊の雲雀いと高く
夏ハ木草の葉も茂り
夕暮かけて飛ぶ蟲は
人は我家を立出でヽ

秋ハ尾花にをみなへし
晴れて雲なき青空に
されど何處も同じこと
冬は雪霜いと深く
なさん爲とて爐火に
風は吹入る戸のあはい

百日紅も咲きにけり
集り來る軒のきは
猶涼むらんさよふけて
桔梗の花も開くべし
照らす月影明かに
寂しく見ゆる家の外
冷ゆる手足を暖かく
近く圍居をする時に
外の方見れバ銀世界

秋容宛然

碌々庵居士曰 僅々數十語能極四時可思之景、兼運轉離合之妙、

此の歌を讀む者誰れか凛然粟を生ぜざらん此の歌を讀む者誰れか慨然節に死せざらん

進軍歌

姓名不詳

丸彈は霰と空に飛び
雷擬ふ砲聲に
我魂の緒も打絶ん
進むに猛き武士ハ
屍ハ野邊に曝すとも
櫻と勾ふ九段坂
祭り納にし諸靈は
寇なす戎夷盡るまて
劍は野邊の電か
吹き來る風も腥く
今はの時ぞ勇壯しく
躊躇ふことは何のその
名は后の代に馥郁しく
空に聳ゆる靖國の
是れ大丈夫の龜鑑ぞへ
假令や火の中水のそこ
何爲厭はん敷島の
堅きに堅硬き金剛の
人皆なゑて羨慕す
放鄕人に品格高く
倭魂飽くまでも
石より光輝灼々ハ
青白なせる桐の章
錦繡を飾る心氣よさ

行軍歌

姓不詳

我が日本の國体ハ
神の御國と稱へきて
遠き戎夷が國までも
射や草葉の露計り
類少なき緒環の
守るハ誰の職務ぞや
故き神代の頃よりも
五百海坂隔てたる
光輝く旭子の
侮り受けし例しだに
盡きぬ皇帝の功績を
誠實ある身は甘美にも

進めや〳〵諸共に王の所愾に敵するハ是ぞ倭人の心にて古今の國に冠絶し皇統今に連綿と輝やく朝日の勢を千代

八千代迄保つへし噫同胞の兄弟よ

五の訓戒銘肝して
多聚かる人の其中に
厚き仁惠は駿河なる
伊勢の海すら尚は淺し
寇なす戎夷有もせば
討ち夷けて大君の
束のあひだも忘るなよ
醜み御楯と拔擢れて
不二の高峯も尚は低く
其の皇に若しや又
躊躇ふ事いなきものを
御心慰め奉れ人

此一編老境に在りて幼界の事を述ぶ幼界の樂老境の憂宛然眞に迫る而ふして人情の均しき

ロングフェロー氏兒童の詩　尚今居士

來れわらへべ傍はらに
我等が多年苦みて
忽ち解けし露ほどの
汝が遊ぶさま見れば
なほとけざりし疑い
曇りも胸に止まらす

洋の東西に差別なし誰れか一概に洋人を稱して無情殘忍の人と云うや諸君チットは此等の詩を看て人情の異ならざるこを悟れがし

汝か遊びたはるゝを
窓打あけて日に向ひ
清く流るゝ川水に
見るは恰も東なる
さへづる鳥の聲聞て
臨むが如き心地せり
流るゝ水も鳥の音も
心の如くゆたかなり
かなしき秋も過去りて
照らすあさひも汝等の
されど我等の心中い
寒き雪霜ふりにけり
童はべ無くば世の中い
童はべ無くば我々い
前を望むもうばたまの
如何に苦しきこならん
後ふり向も憂さばかり
闇の夜中に異ならぜ

知らずや茂る森の木ゝ
清き空氣や日の光り
善き汁液を造り成し

比喩尤も妙
にして開説
極めて巧な
り

知れよ閑けき氣候をゞ
幹にはあらで軟かき
蘖を此世にたとふれゞ

來れ童はべかたはらに
花に戯れ啼く鳥も
如何なる事ぞ告るやを

十八

いと美しき綠り葉に
其作用を施して
幹と枝とを養ふを

うけて早くも感ずるゝ
綠の葉にてありぬるを
葉は童はべに比ぶべし

のどけき天を吹く風も
汝か清きこゝろにゝ
我耳近くさゝやけよ

思慮を巡らし智を竭し
我等が書ける文とても
汝か面の樂しさに

人の賞する詩や歌ゝ
完全無虧の汝等に
汝ゝ生ける詩歌なり

格言

寄隱君子

珍奇からぬ事ながら
深山に睡る虎を見よ
伏屋に籠る牛を見よ

世に數多くあるなれど
及ぶべき者あらざかし
他は皆死にし言葉のみ

碌々庵居士

言はねばならぬそゝ何ぞ
鋭き爪ゝ搏ん爲め
鋭き角ゝ觸るゝ爲め

若しも利用を缺しなバ

斯る眞の道理に
去るに屹々寢もやらで
玉を心に持ちながら
朽るハ人のつとめかや

今ハ昔ととかわり
智惠ある人ハ敬ハれ
況て明治の大君ハ
既に布れし聖膚の

主等の慈悲に悖らん

塵の曇りも無るべし
磨き立たる連城の
犁鉏とりて小山田に
哀れと云ふも愚なり

貧富貴賤の差別なく
博學人ハ尊とまる
公平無私の御制体
芽出度規則あるぞかし

振へやふるへイザ振へ
振へやふるへイザ振へ
此國民を英佛の
是れぞ日本の心なり

自由の歌

天にハ自由の鬼となり
自由よ自由、やよ自由
天地自然の約束ぞ
此世のあらん限りまで
いかにぞ仇に破るべき
月に村雲花に風

古今の通患

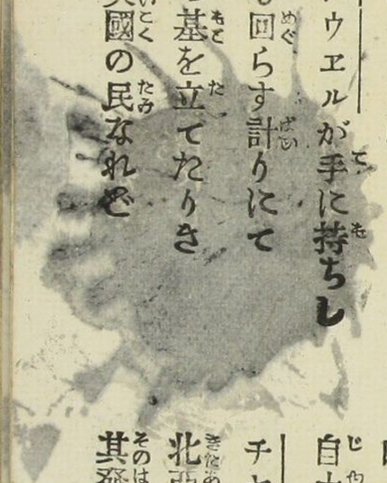
振て民の杖となり
振て國の基礎となり
上に踏して威を揚よ
是ぞ日本の心なり

小室屈山

地にハ自由の人ならん
汝と我のその中は
千代も八千代も末かけて
二人が中のやくそくを
さわ去ながら世の中は
まゝにならぬハ人の身ぞ

話せゞ長いとながら
その人民を自由にし
數多の人のうき苦勞
我權勢を張らんとて
企てたりしシーザルゝ
議員の中に殺されたり
民を奴隷になさんより
我の羅馬を愛するは
羅馬の民の望みなら
捨る命ゝいと易し
自由を壓制なさんとて

古し羅馬の國と聞く
共和の政治を立んため
それをも知らで慾のため
再び帝位に昇らんと
その親友の手にかゝり
その親友のいふことは
寧ろセザルを殺さばや
親友よりも甚し
我身も茲に諸共に
佛蘭西國のルイス帝
種々に手段を廻せど
邪道ゝいかに正道に
民のいかりは火の如く
岩をも碎く勢ひに
黄金をかざす冠は
哀れ墓なくなりけるゝ
自業自得と言べけれ
同じ車の一ツ轍



コロンウエルが手に持ちし
天をも回らす計りにて
自由の基を立てたりき
もと英國の民なれど
打ちかつとのなるべきぞ
又洪水の溢れ來て
いと長くも帝王の
頭顱機械の上に落ち
誰を怨みん壓制の
英吉利國の革命も
昨日の王ゝ今日の賊
自由の旗の招きには
チヤールス王を誅戮し
北亞米利加の合衆國
其發端をたづぬれゞ

自由の人となりたさに
深山荊棘いまだ愚か
あを海原を打ち渡り
殖民なせし心根い
然るに猶も英吉利の
暴君汚吏の壓制に
義兵を擧ぐると聞からに
死ぬる覺悟で七年の
遂に敵をば追ひ拂ひ
ワシントンの名に負へる
國のはまれや勇ましい

自由の筆を
以て自由の

故郷の名殘に氣を止めぜ
人のふみてしともなき
見も知りもせぬ亞米利加へ
いかにあへれに思ふらめ
はだしの綱は離られぜ
詰り詰りて國の爲め
我後れじと親も子も
長の月日の攻め守り
目出度立てし獨立國
都と共に榮へゆく
嗚呼彼と云ひこれと云ひ

理を說き古
來の虐主を
臚列して國
民の塗炭を
述べ以て吾
人に自由の
須臾くも欠
ぐ可からざ
る事を知ら
しむ讀む者
一場の話言
となし漫に
看過するこ
と勿れ

自由の爲にい昔より
又死にわかれするものを
土地にかわりいあるなれど
人の自由といふもののい
つとめよ勵め諸人よ
余此文をかきおいる
眠りをさます鐘の音の
碌々庵居士曰、以二自由二字一說去說來、斡旋有レ力、

數多の人の生き別れ
我東洋の人ぢやとて
なぞか心に變るべき
天地自然の道なるぞ
鼻屈の民と云るゝな
時しも春の夢枕
いともさやかに聞へける

非四有二大活眼一者三、不レ能レ言也、

チヤールス、キングスレー氏の悲歌、山仙士

無常を告ぐる入相の
鐘の音するたそがれに

離別の情寫し來りて妙人をして漣然たらしむ

三人の漁父ハ帆を上げて
走らす船ハ進めども
心の中ハ皆同じ
沖に向ひて行める
まうけハ薄く子澤山
洲に打掛る浪音の
かせがにやならぬ男の身

三人の漁父の妻三人
鐘もほのかに聞ゆれバ
火を挑げんと立寄りて

入る日をさして西方に
妻子の爲に引かさるゝ
父の出船を眺めつゝ
童子ハ外に餘念なし
雨の降る日も風の夜も
最とすさまじき其時も
袖のひぬのハ女の身

日も西山に入相の
共に籠りし燈臺の
つまめる心の夫思ひ

窓の戸開けて眺むれバ
空打過るむら雲ハ
暴風ハ如何に吹けバとて
洲に打掛る浪音ハ
かせがにやならぬ男の身

朝日かゞやく砂磯に
殘るハ三つの屍ねぞ
歸らぬ旅に門出して
髪振り乱し取りすがり
目もあてられぬ風情なり

驟雨やら暴風やら
色黑〳〵と物すごし
水かさハ如何に增せバとて
如何程すごく聞けバとて
袖のひぬのハ女子の身

潮引き去りて其跡ハ
三人の漁父の妻三人
歸らぬ夫のなきがらに
消る計りに泣入て
かせがにやならぬ男の身

眞情々々

其意の存する處其筆の健なる豈支那者流の論にあらんや

袖のひぬのハ女子の身
一ト日も早く樂をせん
寄せ來る浪のくだけつゝ

擬代悲白頭翁詩

都のにしき桃櫻
無常の風にさそハれて
木梢を去りてしほ〳〵と

此處ハ何國そ名にしあふ
二八ばかりの乙女子が
露の命のはかなさを

一ト日も早く世を去らバ
屍の跡の砂磯に
鳴りたきや鳴れよゑゝ儘よ

北溟釣史

色香めでたきその花も
名殘おしきにオサラバと
落ち行く先きハ誰が家ぞ

墨田河原のかたほとり
飛び來る花に打ち向ひ
かこつもいとゞ哀れなり

今年の花も散ぬれバ
顔の色香も失せけるか
逢ふてかこつハ誰やらん

情を知らぬ杣人の
賤が伏屋の薪なり
蒼海原になりきてふ

過ぎしむかしの曙に
草葉の露と消えハてゝ

我身の上も同じこと
またこん春の初花に
思ひやるさへうたてやな

斧にふるれば深山木も
桑の園生も小山田も
ことさへ人の言ふぞかし

花を賞たる古人ハ
爺の小膝の穉兒が

今また落花にあハんとハ
頼み少なき浮世かな

去年に咲にし其花ハ
今年も更にかわらねど
かわり易きハ人の上
去年に花見しその人ハ
今ハ何處に眠るらん
花のこなたに見ゑぬめり

龜鑑か

幼なかりし其日にハ
春の蝴蝶のよねんなく
樹の下陰に打ち群れて
戯れあそぶ舞の袖
天津乙女のうたひして
いとも樂しく暮しけり
去るに一ト日ハはかなくも
病ひの床にふし柴の

三十

もゆる思も消ぬハてゝ
春の初花若みどり
秋の鹿の音月影も
我身にとりて用ハなし

幼なき時余もまた
花の顔月の眉
うつろゐて行く世の習
今ハ頭に霜おきて
あわれ翁になりにけり
あわれ汝もまた心せよ

哀憐の情想べし

眺めにながめつくゞと
杖にすがりて其むかし
舞ひつ謠ひつせし野邊を
たそがれ時に眺むれバ
それとも知らぬ鳥の音の
いとも哀れに聞ゆなり

楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓の歌　姓　不　詳

建武の昔し正成は
是れ一歳都攻の有しとき
肌の守りを取出し
之を汝に與ふなり
下し給ひし綸旨なり
世れ尊氏の世となりて
余れ兎に角になるならば
鏡にかけて見る如し
叡慮を惱し奉らんれ
父の子ならば流石にも
去れ去り乍ら正行よ
弓張月の影くらく
忠義の道は兼て知る
打洩されし浪寇を
家名を汚すとなかれ
吉野の山の奥深く
あれみ扶助し隱家の
流れも清き菊水の
月の桂れ薄や
敵を千里に追ひ退けて
旗を再び飜へし
叡慮を安んじ奉れ

句々悲壯自ら獻秘其の數を知らぜ

嗚呼叡慮を安んじ奉れ

高僧ウルゼーの詩

おさらばさらばいざさらば
榮譽に永く別るへし
利運の端の芽出しなば
位に位ひ重なりて
愚な胸に思ふ樣
天にも登る龍なりと
冬やゝ深く置く霜の
根までを枯らす霜枯に
見るも憐れな有樣は

おさらばの數字何等の勇筆ぞ

山仙士

再び會れぬ曉乞ひ
人の習れ皆都て
八重咲きにほふ花盛り
榮曜榮華を極むれれ
運命強よく願かなひ
悦びいさむをろかさよ
情け用捨も荒野原
運極れまりて身の墮落
我が今日の身の上ぞ

永の年月心なく
浮袋にてうかゝと
丈の立たざる淵に入り
こらへをふせぎ張り裂けて
忠を盡して年寄れる
身の零落に涙川
浮世の虚飾や譽れ程
今に至りて我が胸に
廣き世界の其内で
此世を渡る男ほど
願ふ所ゝ其笑顔
名譽の海に浮べるゝ
游ぐ童子に異ならぎ
飽まで強き我が意地も
勞れいでたる精神に
其の甲斐もなく今ゝはや
水屑とこそゝ成るべけれ
忌むべき物ゝあらぎかし
初めて悟る所なり
王者の機嫌取りゞに
憐むべきゝ無きぞかし
恐るゝ所ゝ其不興

後人綴て如斯

彼と是との氣がねして
軍するより尚ほ多し
遂に零落する時ゝ
再び浮ぶ瀬ゝあらず
憂き恐怖さの數々ゝ
女子の機嫌取るに增す
天より落るルシフアなり

碌々庵居士曰、字々悲壯、巧摸二寫寵臣末路之眞一
境一身無二才藝一、徒恃二君寵一、以弄二威福一
者、須レ足レ爲レ誡矣

シヤール、ドレアン氏春の詩　尚今居士

いかで好まぬ人あらん
春ゝ心のをのづから
春の景色のゝどけさを
冬ゝ物事さびしさも
雪もみぞれもふる雨も
とけて樂み限りなし

人をなやますとぞなき

北風強く吹く冬ハ
雨もこほりていと寒く
爐火近く圍居して
されど嵐も雪も歎む

曇りがちなる冬の空
されど春にもなりぬれハ
光りのどけき天を見る
跡も殘らず消うせぬ

のどけき春の來る時ハ

野邊にハ深雪木ハつらゝ
障子ふすまを建回ハし
ねぐらの鳥に異ならぞ
のどけき春の來る時ハ

日影もうすく晝くらし
喜ばしくも雲ハれて
いぶせく降りし雪霜ハ
のどけき春の來る時ハ

女子を勵ます詩

冒頭の數句忽ち人をして奮發せしむ

勉めよ〳〵女子諸君
教の道も改まり
男尊女卑の風習も
諸君も此機を失ハず

勉めよ進めよ女子諸君
取りも直さず國の母
其子の爲の幸不幸
亦皆母の教へより

一山居士

今ハ昔と異なりて
三從七去ハ地を拂ひ
既に大かた去りければ
勉めよ〳〵諸共に

諸君ハ人の母なれバ
母の教のよしあしハ
國の榮ふも衰ふも
勉めよ進めよ諸共に

進めよ學べよ女子諸君
教師ハ讀み書き算術や
人を教ふることならじ
皆なさゝるの罪なれバ

學べよ研けよ女子諸君
西洋男女の關係を
同權論さへ唱へける
慚る心のありもせば

童子の死を悼む詩

夏ハ過ぎけり初秋の

諸君ハ卽ち教師なり
其外普通の藝なくバ
能せざるにハ非ずして
進めよ學べよ皆共に

諸君聞かずや又見ずや
健げな婦人ハ吾れ一と
彼と我とを顧みて
學べよ研けよ諸共に

外賢居士

いとゞさびしき夕暮や
あハれにすだく蟲のねや
いと物凄き風ぞふく

彼鳥部野ハ如何ならん
彼兒の友ハ多かるも
遊び戯れ樂むに
友に離れてさまよふと

皆すこやかに己が儘
彼兒ばかりハ鳥部山
屍留めて去りし魂
思ひつゞくる果敢なさや

墓場の前に立つる花
悪しき病にをかされな
嘆きにしづむ父母が
手向の水も吾子が爲

獻歌讀過す

心順直に生長てと
恋の泡とぞ消え失せて

實にやうき世ハ夢なれや
今日ハ彼世に旅立ちて
幽かに見ゆる眼前に
魂にハあらで煩ひし

ロングフェロー氏玉の緒の歌　巽軒居士

眠る心ハ死ぬるなり
見ゆる形ハおばろなり
あすをも知らぬ我命
あれはかなき夢ぞかし
なぞゝあれに云ハ惡し

愛で育てたる事も皆
名のみ殘しゝそとバかな

昨日彼兒の顔見しが
言かハさん術無さか
顯れ來しハ亡き魂か
心の作る幻影か

自由の筆結び得て妙頓々

る能ハぬ情況可想

世人多くは此理を解せず噫

我命こそまことなれ
墓ハ終の場所ならぞ
いふハからだのうへのこと

人の願ハよろこびか
人の願ハこれならず
今日よりまさる明日をまて

業ハ久しく時ハ馳す
皷の如く擊ち續け
死出の旅をぞはやそなる

我命こそたしかなれ
人ハ塵にて又散ると

人の願ハかなしみか
唯怠たらぞはたらきて

強き胸だも亦たえぞ
一ト日〳〵にちかくなる

爭ひ多き世の中に
なりてます〳〵進むべし
犇かるゝ牛となる勿れ

懶惰家の金針

如何に未來の樂しきも
共に之をゞ捨ておきて
はたらくべきの今日ゞかり

すぐれたる人世に多し
勉め勵まゞ斯くならん

われとても人相同じ
ゆめ怠たらず勉めなゞ

此身を寄せて先鞭に
言なき啞となる勿れ

如何に空しき過去なるも
われを忘れず神を知り

人間所至有青山

長く殘さん此名をゞ

海より荒き世の中に
獨り漂ふ我友は
我名を聞きて進まなん

舟失ひて波の間に
我名を聞きて勇まなん

さすれゞ人の氣を張りて
如何なる運も事とせず
樂あるぞはたらけよ

事業ゞかりに心して
高きに至れ馳せゆけよ

少年某氏を悼む

やよ某よそれがしと
喚べど叫べど答なく

碌々庵居士

いと高々な九重の
地ハ茫々と見ゆるのみ
月に譬へハ満なれど
其容貌ハ壮健な
櫻の花の如くにて
實にこそ稀にみるところ
雪や螢の勤して
衰れ病に伏柴の
復たと歸らぬ旅出して

やよ某よそれがしと

天ハ寞々いと廣き
氏よ氏の年ハ三五なり
固より人の蕾なり
顔の色香ハ桃又ハ
尚質朴な有樣ハ
若干年の其の間
敢て一ト日も遑なし
戸扉を明けて墓なくも
あの世の人となりにけり

喚べと叫べど答なく

いと悲しげに吹來る
夜ハ凄々と覺ふのみ
深き學びの荒海に
互に勵みハげましつ
寂莫しき秋の月の夕
寒氣さ嚴しき冬の夜も
いと〳〵樂しく暮しけり
思ひ回せバ血の涙
袖もたもともしんめりと

やよ某よそれがしと

風ハ蕭々いと深更き
氏よ氏ハ吾と諸共に
うきつ沈みつ漂ひつ
のどけき春の花の朝
暑氣さ烈しき夏の日や
いと怠らぢ撓みなく
過ぎし昔をつく〴〵と
止めんとすれど止められぢ
ぬれて乾る間もなかりけり

喚べと叫べど答なく

氏よ氏ゝ獨り門出して
訪ふに訪れぬ尋ぬるよ
只聞く歸鴉の鳴聲と
窓に倚りて山鳥の
顏の色香の桃又ゝ
其容貌の壯健な
吾側近く髣髴と
今此文をかきならべ
來り饗せよ一ト壺の

説下し得て妙

松の綠
靜かに四方を見渡せば

四十六

何處に今ゝ去りしかや
何の詮すべなかるべし
入相告る鐘の音
尾の長〳〵と悼むうち
櫻の花の如くにて
樣ゝうつゝか幻影か
みゑつ隱れつする樣な
汝をまつる汝ぢそれ
酒ゝ清けく香ばしく

天外處士

東の山に西の野に

池の南よ河の北
夏ゝ五月花に百合菖蒲
冬ゝ水仙玉椿
四時遠ち近ちに咲き誇る
其麗しさ愛でたさゝ
寫すべきにゝ嵐ふく
或ゝ香を愛で色を愛で
都雅に耽る人ろの
理りとこそ思ゝるれ
又彼是を思ひ換へ
心細かに見來れば

轉し得て妙

春ゝ櫻や梅に桃
秋ゝ紅葉や菊に蓮
木々草々に枝に葉に
花ゝ姿も色も香も
拙なき筆のとても能く
田の面水の邊杖を曳き
又其姿を慕ひつゝ
探り尋ねて徃き來ふも
左ゝ去り乍ら退ひて
其の香其の色其の姿
姑しの夢裏の夢にこそ

又水の面の泡にこそ
一ト夜の嵐に又雨に
情も白妙峯の雪
旭日に融ゑる夫よりも
之れをバ庭の松が枝の
緑の色も變へもせで
雨にも風にも又寒さ
耐へて忍びて忍び音に
家ハ傾き庭も亦た
立つる操のいと淸く
或ハ心を慰めて

見よ盛りなる色も香も
はかなくちりぬる狀況ハ
瓦の上に置く霜の
尙ほ恃みなく見へさする
百年千歲よろづ代も
四時の花にも誘ハれで
霜の夜雪の朝たにも
人ハ幾代も變れども
荒れて寂しくなる迹も
或ハ人の範となり
撓まぜ倦ます爭ハぜ

高く聳へて只獨り
其の潔よき心根に
恃み難なき物ぞかし
一時の夢に迷ハされ
忘れて近く眼前り
或ハ遊び又た驕り
山援く力ある人も
黃金ハ倉よ溢る共
父母の惠みハ厚くとも
身ハこれ波間の捨小舟
救の船を待つ迎も

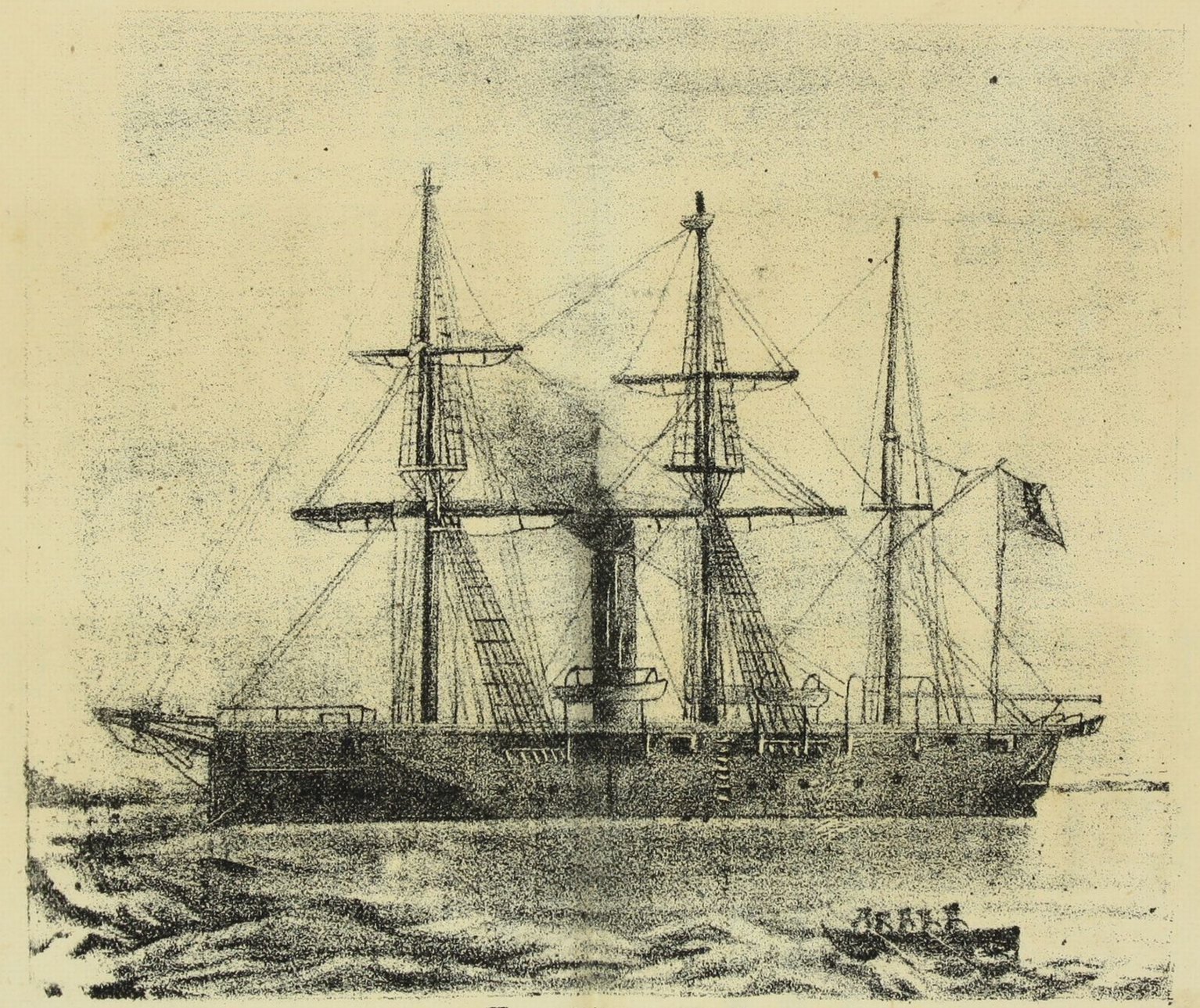
永き榮を求めぬる
比べて見れバ實に花ハ
人とても亦左るにこそ
遠き世までの譽れをバ
榮曜榮華に時得顏
末の榮を求めぜバ
世掩うオのある者も
位ハ如何に高くとも
妻子の扶け多くとも
寄る邊涙に袖ハ濡れ
荒き波風爭でかハ

底の藻屑となるとを
人も見捨し身なりせバ
西と東の別ちなく
花の色香に眼眩れ
身をも家をも亡ぼせし
努力忘れぞな錦なす
松の操を慕ふこと

五十

稼々庵居士曰、晨爲榮華暮爲悄悴、細人生計之常態也、歳寒而知松柏之後凋、是君子之其名獨薫然乎万古者也

免るべきか神も亦
今も昔も押しなべて
何國も同じ春秋の
松の緑を露知らず
例ハ許多あるなれバ
花をも愛でお緑なす
松の操を慕ふこと



英國軍艦ノ圖

英の國威を
地上に振ふ
誠に以ある
かな

カムプベル氏英國海軍の詩　尚今居士

英吉利國の海岸を
一千年のその間
戰爭のみか嵐をも
敵を受くともたゆみなく
軍烈しくあらばあれ

立ちくる海の浪間より
汝を援けたまふべし
其甲板ハてがらの塲
大子ルソンやブレーキの

固く守れる水兵よ
汝が建つる大旗は
丈へ得たれバ此後も
勇氣の限りひるがへせ
嵐も強く吹かバふけ

汝が祖先あらハれて
蓋し祖先の軍艦の
大海原ハ其墓塲
死にし處ハ人しのぶ

勇氣凛冽紙上に溢る

軍烈しくあらばあれ

四方海なるブリタニヤ
山とたちくる波とても
慣れて我家に異らぬ
船より放ち轟かし
軍烈しくあらばあれ

國の光とたてし旗
危難も都て解け去て
其時汝つゐものぞ

嵐も強く吹かばふけ

とりでも城も用ゐなし
千尋のそこの淵とても
いかづちなせる大砲を
波をわけつゝ進み行く
嵐も強く吹かばふけ

盆々光り輝きて
大平の日にもどるらん
いさはし譽て諸人が
歌に唱ひて悦びて
烈しき軍すみし時

グレー氏墳上感懐の詩　尚今居士

鐘ゐなりつゝ野の牛ゐ
山々かすみいりあひの
耕す人もうちつかれ
徐に歩み歸りゆく
たそがれ時に殘りけり

安樂限りなかるらん
強き嵐のやみし時
忽ちにして
人の感懐を
勃起せしゐ
何等の老筆
何等の快筆

四方を望めば夕暮の
景色ゐいとゝ物寂し
唯この時に聞ゆるゐ
飛び來る蟲の羽の音
遠き牧場のねやにつく
羊の鈴のなる響

猶其外に常春藤しげき
近よる人をすかし見て
訴へんとや月になく

かしこにい楡又こゝに
其下かげにうづだかく
壙に埋もれてこの村の

のきの燕もにいとりも
あさぼらけにぞなりぬれど
冥土の人の眠をゞ

塔にやどれるふくろふの
我巣に寇をなすものと
いとあわれにも聲すなり

あらゝぎの木ぞ生茂る
苔むす土の覆ひたる
古人長く折眠る

木魂に響く角笛も
かまびすしくいありつれど
覺すとこそなかりけり

鴫筆々々

死にたる人のはかなさよ
妻のよなべも誰が爲ぞ
錦の歸りをよろこびて

晉てこの世に居し時い
山もはたけも其くいに
繁れる森も其斧に

功名とても浮雲の
この古人の世の益と

身を煖むる爐火も
愛るめらべがかたことに
小膝にすがることもなし

麥も小麥も其鎌に
手荒き馬も其むちに
まかせて君ゞ儘なりき

過るが如きものなれバ
骨折するも不運をも

ねびしき妻子の暮をも

富貴門閥のみならず
浮世の業利多けれど
草葉の露もおろかなり

苔にうもれし古人い
あたりまばゆき屋の内に
樂器の音を聞すとも

ひつき肖像美を盡し

笑ふべきにいあらずかし

みめ美しきをとめごも
いつか無常の風吹かば
黄泉に入るの外ぞなき

墓場の上に寺をたて
頌歌の聲に合すなる
身の不徳とな思ひそよ

人の尊敬多くとも

可想々々

ひとたび絶ゑし玉の緒を
へつらふ人のはめ言も

考へみれば廢れたる
世にすぐれたる量ありて
詩文の才も多けれど

學びの海い廣けれど
心の性い賢きも
世のはまれをば聞かずして

つなぎとむべき術いなし
長き眠い覺すまじ

ひとたび絶ゑし玉の緒を
へつらふ人のはめ言も

考へみれば廢れたる
世にすぐれたる量ありて
詩文の才も多けれど

此古墳の古人も
國を治むる徳を具し
あらはれずして失せけるが

渡る船路を知らざれば
身い賤しくて貧なれば
空しく鄙に終りけり

深き水底求むれバ
高き峯をバ尋ぬれバ
千代の八千代の昔しより

實に此墓に埋もれて
詩ハ描くもミルトンに
クロムエルにも比ぶべき

議院の議士を服さしめ
國の安危を身に委ね
此等の事ハおしなべて

輝く珠も有ぞかし
香る木草の多けれど
人に知られで過にけり

業ハおとるもハムデンに
國に軍を擧ぜとも
人のかバねやあるならん

人のおどしも外に見る
高き擧望を民に得る
古人何ぞあづからん

恵ハひろく及ばねど
不徳もいとゞ少なしや
民をなやめて利をあみす

まことをかくすそら言に
且つ巧なる詩文もて
是ハ都の弊なれど

又常々のふるまひに
人を殺して王となり
夢にも見まじさるとれ

恥るを忍ぶ心の苦
富貴に媚る世の習
未だ此地に及ばさぜ

此處に生れてこゝに死に
其身ハ浄き蓮の花

都の春を知らざれバ
思ひハ澄める秋の月

實に厭ふべき世の塵の

されど収めしなきがらの
建し石碑い今もあり
醜しとてもたび人の

碑面にゑれる名に年齢よ
紀念の功い有ぞかし
文句を引きてゐりたるは

蓋し此世に生れ汲て

無限の感情

六十

心に染みしことぞなき

しるしの爲と側近く
文い拙く彫りざまい
憐を爭でひかざらん

記しに文字い拙くも
又有がたき經文の
人に無常を諭す爲め

程なく死ぬる其時に

別れの惜しき事もなく
心の外に打捨てゝ

眼の光り止むときは
たましひ体を去るときは
たとひ燒くとも埋むとも

偖又此に古人の
いつか歸らぬ旅に立ち
如何せしやと思ひやり

浮世の花の榮をバ
去り行く人はなかるべし

戀しかるらん身のやから
いたく慕はん妻子ども
人の思ひい消ねいせじ

いかれい書けど余とても
過ぎ行く後い世の人の
尋るともあるならん

しからん時ハ此さとの
老人斯くぞ曰ふならん
昇る旭を見バやとて

又彼處なる川バたの
めだかまりたる根の側に
流るゝ水に打臨み

又彼處なる常盤木の
かしら傾けうでを組み
とゞかぬ戀の口惜しさ

頭に霜を重ねたる
我儕ハ彼れが朝早く
岡に登るを常に見き

枝のび垂れし山毛欅の木の
身を横たへて晝いこひ
其常なきをかこちけん

木立の下にさまよひて
知る人なさの歎かしさ
世のうさなどをかこちけん

さるにひと日ハ彼の人を
絶て見るゝなかりけり
野にも森にも川邊にも

又其のつぎの朝ばらけ
まさしく彼れの爲なりき
彼の山櫃の陰にある

碑文

土に枕しこの下に
富貴名利もまだ知らず

慣れし岡にも樹陰にも
其翌朝になりぬれど
身をバ現ハすことぞなき

屍送る歌きけバ
君ハ字を知る人なれバ
碑文を讀みて知り給へ

身をかくしたる若人ハ
學びの道も暗けれど

一結悠然

あれ此世を打捨て　　あの世の人となりまけり

仁恵深き人なれば　　天も憫み報ひけり
憂き人見れば涙ぐむ　　(外に詮すべなき故に)
ひとりの友のありしとき　　(外に望みはなかるらん)

これより外に此人の　　善し惡し共に尚深く
尋るとても詮はなし　　たましひ既に天に婦し
後の望みをいだきつゝ　　神にまぢかく侍るなり

碌々庵居士曰、百年同謝西山日、千秋萬古北邙塵、嗚呼人生之須臾蟪蛄不レ啻、宜哉託二餘音於悲風一、

立見尚文

軍旗の歌

二千五百年以來　　光り輝く日本國
その國守る軍人よ　　汝の仰ぐ大旗は
我大君の御標ぞ　　君の御言をかしこみて
いかなる敵をも打攘へ　　忠と勇とに此旗を
地球の上に輝かせ　　いかなる寇をも打攘へ
忠と勇とに此旗を　　地球の上に輝かせ

昇る旭ともろともに　　代々の皇のかみ〴〵は
汝を援け玉ふべし　　汝の功を立る場は

此八洲國の内ならで
神功皇后豐太閤
忠と勇とに此旗を

四方海なる日本國
未曾有の敷金城は
翼さ猛しき鷲迚も
我皇國に寇を爲す
雷ちなせる大砲を
いかなる敵をも打攘へ
地球の上に輝かせ

外つ國々に在りとしれ
昔しの功績想べし
地球の上に輝かせ

砲彈よりも艦よりも
汝撃忠義の軍人ぞ
爪牙鋭き獅子迚も
兒者共の在るならが
電光あざむく劍ぎもて
忠と勇とに此旗を

皇國の靈と軍人が
昔い弓矢鎗刀
汝の帶べる銃劍は
揮ふべき時揮ひつゝ
此大御旗を推し立てゝ

用ゆる利器へ何物ぞ
今は銃砲軍艦よ
大和魂ある人の
驚をも獅子をも打攘へ
いかなる敵をも打攘へ

我大君の御標ぞ
益々光り輝さて
吾々陸海軍人の
祝ひ唱ひて悦びて

國の光りと建る旗
寇を平げ民を撫で
功績譽めて諸人が
榮譽は限りなかるべし

烈しき戰すみしとき
益々光り輝きて
御稜威ハ世界に響らん

拔刀隊の歌

吾れは官軍我敵は
敵の大將たるものハ
是れに從ふ兵士は
鬼神に恥ぬ勇あるも
起せし者は昔より
敵の亡ぶる夫れ迄ハ
玉散る劍拔き連れて

賊兵を弄する者をして
讀ましめバ
刃に血ぬらずして降を
乞ふならん

國の光りと此旗と
萬世不朽の帝國の
御稜威ハ世界に響らん

、山仙士

天地容れざる朝敵ぞ
古今無雙の英雄で
共に慄悍決死の士
天の許さぬ反逆を
榮へしためし非ざるぞ
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

皇國の風と武士は
維新以來廢れたる
亦世に出る身の譽れ
刃の下に死すべきに
死すべき時は今なるぞ
敵の亡ぶる夫れ迄ハ
玉散る劍拔き連れて

前を望めハ劍なり
劍の山に登るのハ

其身を守る魂の
日本刀の今更に
敵も味方も諸共よ
日本魂あるものは
人に後れて耻かくな
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

右も左も皆劍
未來の事と聞さつるに

此の世に於ひて面のあたり
我身のなせる罪業を
賊を征伐するが爲め
敵の亡ぶる夫れ迄は
玉散る劍抜き連れて

劍の光閃くは
四方に打出す炮聲は
敵の刃に伏す者や
絶て果かなく死する身の
其血ハ流れて川をなす

劍の山に登るのも
滅す爲に非らぞして
劍の山も何のその
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

雲間に見ゆる 電か
天に轟く 雷か
丸に碎けて魂をの
屍は積て山をなし
死地に入るのも君の爲め

敵の亡ぶる夫れ迄ハ
玉散る劍抜き連れて

進めや進め諸共に
死する覺悟て進むべし

彈丸雨飛の間にも
進む我身ハ野嵐に
果かなき最後を遂る共
死して甲斐ある者なれバ
我と思はん人達は
敵の亡ぶる夫れ迄は
玉散る劍抜き連れて

二つ無き身を惜まぞに
吹れて消ゆる白露の
忠義の爲に死する身の
死するも更に恨なし
一歩も後へ引なかれ
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

世上不義卑怯の徒をして須らく讀ましむべし

我れ今此に死なん身ハ
捨つべき者は命なり
忠義の爲めに死する身の
永く傳へて殘るらん
義もなき犬と言はるゝな
敵の亡ぶる夫れ迄ハ
玉散る劍拔き連れて
碌々庵居士曰、句々拔刀、字々流血、是之謂二字稱レ題、々稱レ句

勸學の詩　尙今居士

昔し唐土の朱文公
よに博學の大人ながら
君の爲めなり國の爲め
縱令屍ハ朽るとも
名は芳ばしく後の世に
武士と生れた甲斐もなく
卑怯者ぞと謗れな
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

輕々觀過すべからず句々段々殖千金

わが學問をすゝめんと
一生涯ハ春の夜の
少年易老の詩を作り
夢の如しと嘆きけり
人の高卑を問はぞして
いかに才能ありとても
起さぬことのあるべしや
國の東西世の古今
學びの道に就くものハ
同じ多少の感慨を
春の初花秋の月
都て此世の物事に
わが學藝を省りみて
夏のみどり葉冬の雪
心をとむる時あらば
過る月日を思ふべし

池のみぎはの春草は
軒端に茂る桐の葉ゝ
此年も半ば過ぬるを

年の月日ゝ長けれど
ひとよの如く思ゝれて
螢や雪の光りにて

昔の人の學問ゝ
なは賢人の嘆さあり
枝に小枝に未葉まで

七十四

みじかき夢も覺ぬまよ
吹く秋風にさそゝれて
ふみ讀む人ゝ知らぞやゝ

難波入江の村あしの
わが身の上のはづかしさ
ふみゝ讀めども業ならぬ

唯ひとすぢの道なれど
今ゝ學藝多端にて
いかで凡夫の能すべき

左ゝ云ふものゝ諺に
海のはじめゝひとしづく
心をこめていつまでも

たとひ多くにわたらぬも
身の爲となる多からん
時に能あり蜜つくる

昆蟲すら斯の如し況や人に於てをや

山のはじめゝ一塊土
いかに急げと詮ゝなし
怠らぬこそよかりけれ

唯一藝を修めなゞ
蜘蛛に藝あり網をはり
何とて蟲に及ばざる

勉めよよたゆみなく
進み進めよよどみなく
難き事とて厭ふなよ

叮嚀の訓誡

學の海よゝ路あり

海より深し
山より高し

教の山にしをりあり

秋夜客舎

櫻さくてふ春過ぎて
茂りくて其後ハ
枯れて淋しき夜半の月
背負ふかりがね交ふ
永き言の葉故郷の
思ひまハせバ七重八重
眺めて心涙持つ
蟲の音色も斷續に
響に旅の夢さめて

起首人意の
表に出づ勁
筆々々

丈夫何かハ怯るべき

訥々庵居士

夏の草木も生茂り
秋の嵐に吹き枯野
空に輝くさやけさを
傳ふる文ハいと永く
音信とこそ知られけり
重なる雲の故郷を
此うき思ひ誰しらん
聞へて憂きし鍾の聲
憂にうき來るうき思ひ

子も亦然ろや

春の朝の花にまた
思ひ餘りてふるさとの
柴の戸あけて庭に出で
訪ふものとてハあらぬ身の
我と景とのふたり連
誰にかつげん此うさを
空を眺めてまた寐屋に
つくゝ聞けバ軒端ふく
實に物うきハ秋ぞかし

夏の涼の舟遊び
事を思ひて寐もやらず
徘徊 瞬躇 誰人も
うつろう庭の面景は
つれハあれども我なれバ
憾み給へ天津空
入りて枕を侶となし
風の聲だに悲しさよ
實に物うきハ旅ぞかし

碌々庵居士曰、錦篇如四借二織女之手一者三小楠公を詠するの詩

嗚呼正成よ正成よ
黒雲四方にふさがりて
惡魔ハ天下を横行し
あたずう果て上をせず
絶る間のなき人馬の音
芳野の山に花見んと
君ゞ御代こそ千代〳〵と
いづれの時にあるなるや
嗚呼大君の御爲に
この世の塵を拂はんと
遠くあなたを見わたせバ
公の逝去のこのかたハ
月日も爲めに光りなく
下を虐げ上をさへ
吹き來る風ハなまぐさく
春ハ來れども花咲かぜ
訪ひ來る人ハ絶てなく
囀る鳥の聲聞は
なげかわしきの至なり
振ひ起りてけがれたる
する人とてはあらざるか
金剛山は巍峨として
雲の上まで屹立し
見ゆる菊水の其旗は
父の賜ひしこの刀
賊の頭らを斬せむ爲め
國の仇なり父のあだ
拂へバ來る夏の蠅
つら〳〵思ひめぐらさば
若しも病に冒されて
不忠不孝と誹られむ
死出のなごりに今一度
君の御影を伏し拜み
繁る林の木の間より
實にこそ國の寶なり
腹をきれとの爲ならぜ
にくさもにくし彼の賊等
斬て捨ずに置べきか
頃は正平戊子の春
元來よわき此からだ
空しく失せし事ならバ
討死するは此時ぞ
願ひかなへて親面り
生きて皈れのみことのり

聞て切なる胸のうち
書き殘したる梓弓
誓ひし者は百餘人
ものともせずに斬まくり
討死せしはいさぎよく
都も遠き村里の
忠臣孝子の鑑ぞと
天地と共に傳はらん

新体詩林發行の祝詞

一山居士

寒來暑往は天地の理
大陽西に沒すれバ
新陳代謝は世の習ひ
月東海の波に浮き

哀れといふも愚なり
引きてかへらぬ赤心を
雲霞の如き大軍を
君の方をバ枕して
いさましかりける次第なり
女わらべに至るまで
譽る其名は香しく
天地と共に傳はらん

此篇も亦新陳代謝の法を以て轉々人の意外に出で通篇滑車の數馬力を加へるが如し

蟹が這ふてふ横文字は
耶蘇基督の教法は
漸船は遂に帆船を
其の外新事が舊事をバ
茲に浪花の花と咲く
江湖の眷顧彌や增して
三十一ト文字の二倭歌
此の文明の社會より
所謂新体詩林てふ
人の心を風雅びにし
獨り光りを日月と
鳥跡の字を壓倒し
佛道儒教を蹂躙し
活字は木版銅版を
排斥驅逐せざるなし
新体詩林も日に月に
尚古者流の愛してし
七絶五律の唐ら詩たも
遂に斥け遠ざけて
名は只名のみに止まらで
又勇氣をも振はしめ
爭ふ實を早晩に

同感

見るは今より知られけるひとたび限る逢瀬なく
歌を集めて月二度
他かの雑誌に比べなば
文雅の点より評するも
富士山よりもいと高く
況して時運の進むをば
或は五回刷り出す

ヒアゝ々

誰れか悦ばざる可きぞ
學べよ此詩を好む人
餘りのとの嬉しさに

能く祝詞の

体に倣ふ

思ふ言の葉書き綴り
聊か祝ふこと然り

明治十九年除夜の吟

碌々庵居士

戀ひなつかしき故郷を
ゆくゑも遠き東國路の
頃しも明治十四年
後に眺めて東なる
みとせの秋も過ぬれい
武藏の原に漂ふて
もと王城と呼ばれなん
夫より西の都なる
川邊にすまひ今は又
音に名高き加茂川の
いと面白に暮しけり
浪華の芦の繁きをも

長き月日もいつの間に
消えて墓なくなりぬるぞ
我身三世を簡畧に
たとゑて言ば水の上に

うきつ沈みつたへまなく
ゆられて後は何處とも
鴎か又ハ櫓も棹も
思ひやるさえ悲しきや

指を屈めて算ふれば
七千二百の日子をも
送りて今ハ初より
影も形もぼんやりと
實に人間のなすとは
風に吹かるゝ一片の

風に吹され浪に又
定められざる萍か
浪にとられし捨小舟
身の毛もよだつ計りなり

但に過ぎゆく二十年
今日よ明日よとむざ〳〵に
立てし志業ハ朦朧夜の
窓に寫せし木梢かな
總て塞氏の馬又ハ
煙と言も道理なれ

春夏秋冬自轉して
河の速瀬か導火せし
既に離れし箭の如し
天下萬國上ハ是れ
吾輩に至るまで
寐ねぜに守れ友人よ

復たと歸らぬ其樣ハ
鉄砲丸か弓弦を
去れバ今復めぐり來て
貴顯紳士や下ハ又
守りて明す師走ぞや
ハやつげ渡る夜半の鐘

彼れ此れ思ひ合すれバ
掃へどもまた生ひ來る
淵の深さもまだおろか

塵や埃の如くにて
深き恨みハ九重の
池の氷が時〳〵に

とけて還たもや凝結れる
長き流れに比ぶるも
論にあらぬぞ何事も

斯る愁と恨みとを
ふして思案の中頃に
フト眼に觸れし書架の酒
是れ幸福よ兼てより
しきりに獨り酌む酒も
思の外に恨愁ハ

長き愁ひハ黄河なる
固より同じ歳月の
たとふべき者無かるらん

遣るもの迚ハあらざるか
嗚呼なさけなと仰向バ
其名ハ麥酒と稱なん
不時の需に備ふるかと
坐に醉ひて面白と
以前と一入增にけり

嗚呼なさけなやゝ
涙と共に訴へて
嗚呼なさけなやゝ
愚なとよ夫れよりハ
昇る旭日と諸共よ
勉めハげみて繙くも

女子に告ぐ

起筆の趣向
至れり盡せ
り

我が日の本の花ぞかし
我が日の本の人々の
外つ國人も仰ぎ見て
實に此花の咲くときハ

この憂さうさを天地に
嘆べと叫べど答なく
この憂さうさを吻くハ
歳月更にあらたまり
嶺然たゆまず怠らず
盡し晩しとせざるなり

明日香小唄

我が日の本の光りぞと
世界に誇る作樂花
愛でぬハなしと聞ぞかし
花てふ花ハ多けれど

冒頭の筆意轉し得て妙なり

其の色其の香其の姿
五大洲中第一の
理りなれや宜なれや
數にゝあらぬ草木にも
然かゝれどもつく〴〵と
花てふ花も光りてふ
櫻に勝さる花にあり
物言ふ花と人ゝ言ふ
左れど昔ゝ此花を
其養ひを怠りて
自からなる生ひ立ちに

並べ見るべき花ぞなき
花と讀けん唐詩も
嗚呼樂もしや日の本の
世界に誇る花ゝ咲く
思ひ廻せば日の本の
光りも佐久良にあらずして
櫻にまさる其の花ゝ
世の乙女子や是ならん
知らざる人の多きより
培ひもせず芸ざらず
任せし故に大方ゝ

此邊の數句眞に文明の原素と云ふべし

見るべき花も咲かぞして
開けし御代ゝ畏くも
敎ふる園を設られ
惠み到らぬ隈もなし
時に後れぞ先ちて
朝な夕なに置き增さる
何ぞかゝ花の咲ざらん
其の色其の香其の姿
艮きに改め人ごゝろを
善き世を造り類ひなき
皆な此花に由るぞかし

散りにしとの哀しさよ
物言ふ花を移し栽へ
東まの東し西の西
物言ふ花に物言ゝん
敎への園に身を委ね
惠みの露に沾ゝゞ
さて此の花の咲くときゝ
佐久良にまして國俗を
高きに進め比ひなき
善き人作り出さんゝ
かゝるときこそ爭ひて

外つ國人も仰ぐべく
是れ日の本の花にして
草木の花ハ佐久良花
盛りに香はる時にあり
時を違へず咲きぬれど
姿比らべて咲き亂れ
何の時にあるならん
物言ふ花よ乙女子よ
御代の惠みを能く思ひ
心に掛けて祈るべし

薄命の歌

扇岳逸士

我が國人も慕ふべし
又日の本の光りなり
皇國の花ハ物言花
作樂の花ハ年毎に
ふたつの花の花比らべ
世界に誇る其春ハ
早く見まはし逢ハきはし
此の理りをよく悟り
皇國の春に入らん日を
心に懸けて禱るべし

通齋恰も蒸
悩機關の運
轉するか如
く滑車回週
するが如し
畏るべし畏
るべし

波瀾なり

骨身を透す山おろし
黒白別たぬ烏羽玉の
わがものなりと思へども
小兒ハ母のふところに
吹き來る風ハいや寒く
降り積む雪ハいや深く
かなわぬ時の神頼み
消ゆる命もたえ〴〵に
たすけ給へよオヽ神よ
助けたまへよこの兒だけ
己が胸よりマントルを
道なき廣野凄じく
暗夜に母ハ兒をつれて
降り積む雪ハ身に重く
すや〳〵ねむり餘念なく
ふけゆく夜ハいや暗く
手足凍えて力なく
潔き心もあわ雪の
くもれる聲で叫ぶよう
たとひ妾ハ死ぬるとも
凍えぬようにして給べと
取りて胸ハのられつ

めでつる孩子が身にまとひ
燒野の雉子の翼より
強ひてつくれる笑ひ顏
熱き涙ハ淵瀨なし
恩愛深き親と子が
鐘ハ何處か聲遠く
牧場に求食る痩狐
さてその次の朝ぼらけ
雪の衣手そがもとに
眼の中に死出の霜
花の姿ハ殘れども

雛を羽がこむ夜の鶴
暖かなりき慈母ごゝろ
冷めたきキッスも是限り
其まゝ沈む雪の床
永さ別れとなき出す
諸業無常とつげ渡り
最とも悲しく聲すなり
旅人此處を過ぎけるに
一人の婦人橋たハり
頰ハつめたく又かたく
浮世の夢ハ痕もなし

宛然如視

旅人やがて懇ろに
小兒ハ見あげ打笑みて
楓の如き手を出して
胸も張り裂く計りなり
嗚呼深ゝかりき慈母情
碌々庵居士曰、一讀三嘆、世之爲子者須以淚眼
讀焉、甲

ブルウムフヰールド氏兵士歸鄉の詩、山仙士

上衣をとれバ餘念なき
わが慈母なりと思ひしか
乳房をさぐる其の樣ハ
嗚呼いぢらしき兒心よ
何とて神ハ無慈悲なる

ありし昔の我父の
涼しき風に吹れつゝ
實に心地克くありにける
椅子にもたれてあるさまハ
堅く作れる臂掛に
その坐をしめし腰掛の

よそぢの昔荒〳〵と
猶あり〳〵とみゆるなり
元にかハらぬ其音色
滿る思は猶切に
忘れんとして忘られず
後に掛けし古署暦
ひら〳〵〳〵と誘ハれて
嵐に逢ふて翻へる
一枚づゝに又下へ
數も合せて二十年
暮せる年の數取りぞ

刻みのこせる我名前
柱に掛けし古時計
聞きて轟く我胸に
ハりさく如く堪ゞたレ
嗟歎に堪へぬ其時に
忽ち寄するそよ風に
上るハ是ぞ陣前に
小幡とこそハ見ゆるなれ
下りて落るその紙の
故郷をはなれ遠國に
打しも家の入口へ

實況寫得妙

來る一羽の知更鳥い
我をつら〳〵不審顏
はにかむ如く見へにけり
嗚呼老ひたりや老にけり
昔の友にあらぬかと
斯く心中に彼是と
眺めにながめつく〴〵と
苔の席を眺むれバ
其美さあてやかさ
是も誰ゞめざ稚子の
數て樂むものなりと
人に狎れたる鳥なれど
怖づるが如く且つハ又
口に云ハねどそのふりハ
それに居ハする武士は
尋ねる樣に見へにけり
物を思へる其間
窓の限に織なせる
綠の色の青〳〵と
又と類ハあらなくに
晨ゆふべの手をさみに
推量すれバいとゝなは

思ひい更にいやまさり
年をも日をも打忘れ
わつと計に啼にけり
あゝ我ながら愚ましと
過ぎ越し方をさまざまに
辱しく又口惜しく
軍の神をのゝしれり
可惜勇士の失せぬるは
殺塲放火分捕の
今更思ひめぐらせば
我身を守るたからぞと

胸いそゞろに塞りて
前後も知らず立上り
稍時ありて心付き
再び椅子につくづくと
思ひつゞけて按ずれば
意いず髪も逆立ちて
名譽の淵に落ち入りて
實に傷敷き事ぞかし
其有樣をつら〳〵と
あら恐ろしやむごたらし
顧みたのめる劍こそ

可想々々

我身の罪をかさねたる
恨いいとゞいやまされ
二人の影ぞ見ゆるなる
あらしの老と見うけたれ
計らずめぐり逢ふ坂や
せきくる涙だ關あへず
嬉し泣きにぞ泣きよける
目元涼しき小女子に
これナンセーと手を取りて
こゝに居やるいやう〳〵と
そなたの伯父のチヤールぞと
仇と思へばなほさらに
聲する方をうちみれば
此影こそいの稚子と
やがて入り來る我父いの
我子の顏を一目見て
我を抱きて老の身の
ろが傍にイめる
腰打屈め老人いの
口を合いすもあまる愛
イスパニヤより歸國せる
云へば女いの近寄りて

しらをの如き指をあげ
そと打彈きぐわんせなく
嗚呼我ながら愚なり
繰返へすこそ無益なれ
此老卒ぞ幸多く
心に掛る雲もなし
碌々庵居士曰、句々流暢、意思巧妙、自有二珠玉之聲一、又曰、一結隱絕、

日本魂

人も斬るべし我身をも
二千年來遺傳せる

落花居士

唯義によりて殺すてふ
我が寶なる日本魂

いと〳〵曇れる老の眼を
笑ふ姿ハ可愛ゆらし
身の上バなし斯く長く
それに付きても兎に角に
浮世の中に今ハまた

字々悲壯句々活潑全篇亦皆膽と云べし

國と君とに身を捧げ
見よや見よ〳〵碧眼奴
鞘を拂へバ玉ぞ散る
小さき國とて侮るな
骨肉共に膽なりと
忠義に滿る神洲の
見よや見よ〳〵碧眼奴
鞘を拂へバ玉ぞ散る
國を護る大丈夫
日本刀ハ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ
皇國を護る大丈夫
日本刀ハ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ
見掛によらぬ中のみハ
人に知らるゝ日本魂
男兒の數ハ二千萬
日本刀ハ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ
國の爲めなり君の爲め
捨つる命ハ親も子も

忘れて知らで一筋に
前兵傷ふる其の屍
見よや見よ〳〵碧眼奴
鞘を拂へバ玉ぞ散る

海を蔽へる軍艦の
死せざる中ハ何のその
みがき上げたる我腕の
見よや見よ〳〵碧眼奴
鞘を拂へバ玉ぞ散る

彌やまし勵む日本魂
飛び越へ進む後瞞隊
日本刀ハ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ

烟をまきて來るとも
爭かで恐れん日本魂
續かん限り試めしみん
日本刀ハ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ

汝聞かずや神后や
三韓征伐竹を破る
全八道の民草ハ
見よや見よ〳〵碧眼奴
鞘を拂へバ玉ぞ散る

下りて豐臣大閤の
勢ひ猛き日本魂
其威其武に靡きしを
日本刀ハ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ

又聞かざるか十萬の
浪瞬分け來る艟艨を
烈しく吹き出す颶風にて
見よや見よ〳〵碧眼奴
鞘を拂へバ玉ぞ散る

元兵我を襲はんと
見て取り怒る日本魂
三人の外ハ亡せり
日本刀ハ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ

サーこい
四字何そ壯
快なる

サーこい來れいざ來れ
ならバ手柄に打て見よ
兵士ハ如何に強くとも
見よや見よ〳〵碧眼奴
鞘を拂へバ玉ぞ散る

デニソン氏船將の詩

暴威を以て下を馭す
天地も容れぬ罪なるに
阿鼻の地獄も及バじな
嗜まんものゝあるなれバ

錦繡々々

獅子諸共に鷲も來よ
皇國を護る日本魂
劍は如何に鋭くも
日本刀ハ腰にあり
切れ味見せんいざ來れ

尙今居士

人ハ此世の鬼なるぞ
其過ちの深きこと
若しや今しも壓制を
わが此歌をよく聽て

其身を深くいましめよ

將たる船の乘組ハ
英吉國の人なれバ
其船將の壓仰を
將が性質猛くして
無きのみならず針ほどの
免すことなし斯て世に
船人どもの心中に
消るひまなくなか〳〵に
人をも身をも諸共に
船將常に望むらく

習て勇々しき武士の
自由の空氣吸ひなれし
勇のみならず信あれど
深く怨みて措かずとよ
慈愛の心露ほども
罪も嚴しく糺し問ひ
將が暴威ハいやつのり
燃る怒のうのはのは
をりさへあらバ燃へ出でゝ
燒かんとすなり然れども
いつか勳功あらハして

わが船の名を轟かし
千萬人に呼ばれんと
湊を過り岡に沿ひ
北に南に何處となく
大海原の眞中にて
帆を打揚げて來る船は
軍の船にまぎれなき
喜び外にあらはれて
船人どもゝ銘々の
眼の中におのづから
將ハ聲色高らかに

古今未曾有の英雄と
一途にこゝろ傾けて
岬を廻り島を歷て
殘るくまなくたゞ渡り
北をはるかに眺むれバ
是ぞ正しく佛蘭西の
わが船將の面色ハ
言葉もいとゞいそがわし
心にたくみありけれバ
喜ぶ色の見えたりと
ものとも船を追ふべしと
一と號令を下すまゝ
敵にまぢかく進みゆく
常に怨みし大將を
大砲はなつものハなし
實にいかづちの落るごと
天地も破裂するばかり
帆架もわれて粉微塵
銃丸繁くふりきたり
甲板のみか帆柱も
生きとし生けるもの共は
もの言ふともかなハねバ
風にまかせて我船ハ
こゝに乘組一同は
にらみて腕を叉きて
されど敵の大砲は
轟きわたるおそろしさ
横木も折れて波に落ち
甲板裂けて容なく
雨かあられか怖ろしや
人の腦やら血汐やら
右に左にうち倒れ
倒れしまゝに顏と顏

慘狀猶斯乎

見合す姿凄まじく
絶えんとしつゝ船將を
嘲り笑ふ氣色あり
頼みし人もことゞく
われを賣りしぞ口惜き
辱と恚のせりあひに
齒がみをなして叫べども
かゞねの上に倒れけり
實に怖るべし惡むべし
失ひしこそはかなけれ
經ぬといへど船將や
血汐の中に玉の緒の
見かへる眼おのづから
將ハ功名立てんとて
我を嘲りにらみつゝ
心のうちハ堪へられぬ
顔色青く赤くなり
終に痛手の疵おひて
嗚呼壓制よ嗚呼暴威
數多の勇士いたづらに
其のち多〻年月を
船人どものしかゞねハ
水屑となりて海底に
さりとも見えぬ波の上に
今沈みて殘るらん
浮べる鷗二三四

碌々庵居士曰、意到筆隨、全篇覺三雲煙之繞囲、妙、通篇快と誠とを以て眼目となす

蘭竹居士

一月元旦

明治もこゝに十九年
春ハ來にけり新玉の
人のこゝろもあらたまり
過し憂こと打ち拂へ
四方を望めバ日の丸の
年の始の元始祭
靡く姿ハ愛たけれ
風に靡かればら〳〵と
春ハ來にけり白雪の
晴て見渡す銀世界
人のこゝろもしらゆきの
昨日の鬼も立去りて

今日の新玉賑しく
國の御旗に輝きて

春ハ來にけり青松の
愛たき春のあかつきを
替らぬ色の青みどり
操正しくこの春を

春ハ來にけり呉竹の
物をも言でさゝやきて
霜をも雪も打ち除き

昇る旭日ハぴか〳〵と
靡く姿ハ愛たけれ

操正しく新玉の
向へて待べる其すがた
さすが日本のたましいか
待べる姿ハ愛たけり

庭にイむその樣ハ
過し憂こと打ち拂え
愛たき春の新玉を
向へて待べる嬉しさよ

春ハ來にけり寒梅の
愛たき春と諸共に
物をも言で笑がは
四方に吹出す其かほり

春ハ來にけり同胞の
松竹梅と諸共に
錦の御旗押し立てゝ
御國のかほり吹き散す

待べる姿ハ愛たけれ

思をこめし新玉の
ほころびかゝる其そがた
花のかほりハいつまでも
散す姿ハ愛たけれ

時ぞ來れり同胞よ
操正しく吾れ先きに
アルプス山の頂上に
散す姿ハ愛たけれ

春ハ來よけり諸人の
英吉利國や佛蘭西も
大西洋のいちめんに
四方に輝く日の丸の

春ハ來にけり諸人の
日本魂あるものゝ
富士の御山のいたゞきに
世界を照す日の丸の

兵士の歌

なす可き時ハ今なるぞ
魯土亞亞米利加何のその
錦の御旗ひるがへし
光る波ハ愛たけれ

喜ぶ時ぞ來りける
磨き磨きし其果ハ
御國の印し押し立てゝ
光る姿ハ愛たけれ

大庭景一

皇國の爲と君のため
我國むかし忠臣と
皇ら帝の御爲に
とゝに屍ハ消れとも
我大君の大御稜威と
共に世界よ輝けり

皇國の爲と君のため
國に寇なす敵あらバ
君に叛ける賊あらバ
彈丸も中らバ避けはせず

力を盡すハ人の義務
仰ぎ尊む楠公は
湊河原の朝露と
香しき名は今もなを
我日の本の國光と
共に世界に輝けり

兵士となるハ民の義務
進んで之を打攘へ
進んで之を打攘へ
劍も我身を刺ばさせ

功名手柄顯して
其名を世界に輝かせ

皇國の爲と君のため
死人の山を踏越て
屍ねをあれ野に曝すとも
天翔り來て事あらば
精國神に祭られて
其名を世界に輝かせ

碌々庵居士曰、一讀汗ニ於全軀一者許多矣、宜丙使ニ此篇一歸乙徒勞一甲

我日の本の國光と
其名を世界に輝かせ

死するの兵士の常なるぞ
劍花の下に斃るべし
なを其靈は消やらぢ
國と君とを守るべし
我日の本の國光と
其名を世界に輝かせ

西鄕追慕の歌

夫れ達人の大觀す
榮枯の夢か幻しか
眞如の月の影淸く
何を怒るやいかり猪の
勇みにいさむはやり雄の
留り難さぞ是非もなき
若殿原にむくひなん
諸手の軍打破れ
霜の紅葉の紅ゐの
薩摩武雄のをたけひに

海舟散人

抜山蓋世の雄あるも
大隅山の狩倉に
無念無想を觀ぜらん
俄にげきする數千騎
騎虎の勢ひ一徹に
唯身一を打捨て
明治十年の秋の末
討ちつ討れつ頽て散る
血汐にそめぢ顧みぬ
打散る玉の板屋うつ

霰たゞしる如くにて
木魂にひゞくときの聲
落つるが如き有樣を
あな勇しの人々や
腕の力もためし見て
いざ諸共に塵の世を
唯一ト言を名殘にて
宗徒の輩もろともに
心の中こそ勇しけれ
昨ハ陸軍大將と仰れ
たぐひなかりし英雄も
面をむけん方ぞなき
百の雷一ト時ゝ
隆盛打見てはゝぞ笑
亥の年以來養ひし
心に殘る事もなし
脫れ出でんハ此時と
桐野村田を始とし
煙と消えしますら雄の
官軍これを望み見て
君の寵遇世の譽れ
今ハあへなく岩崎の
山下露と消えはてゝ
無常を深く感じつゝ
唯悄然と隊伍を整へ
折しもあれや吹き下ろす
岩間にむすぶ谷水の
悲鳴をるかと聞なされ
碌々庵居士曰、結尾有レ力、議論適切、固不レ要二腐辭一
移れバ替る世の中の
無量の思ひ胸にみち
目と目を見合す計なり
城山松の夕嵐
非情の色もなにとなく
戎服の袖を濡らしそうらん

未數句最流暢

新年小學生徒に寄す

安藤新太郎

隙行く駒の足早く
明治十歳も八餘り
悦び迎ふ新玉の

爲學生者須朝讀暮誦焉可矣

春風四方に吹き渡り
雲は間近く降り來て
軒に聳ゆる日の丸の
國の榮えを壽きぬ
或ハ鞠に或ハ羽子
實に治まれる御代の春
光り輝やく其の本ハ
朝夕こゝろ勵まして
花さへ葉さへ咲き茂り
智慧てふ玉を研げバこそ
學びの道を怠らで

空に靉靆びく紫の
飾り立てたる門松や
御旗をこめて目出度も
童子乙女ハ餘念なく
思ひ〳〵の手遊びハ
斯もいみじく日の本の
教への庭に吾れ人の
播きにし種の育ち來て
今日より明日と日に益して
童子乙女よ起居にも
通へよ學びの園許へ

いまのおみらハ石瓦
教へ導く師の言葉
何つか光りも增す鏡
ゆめ怠りぞもの學び
幼なき時に學バぞハ
今日其玉を研かずバ
學べよ學べ道學べ

光りも出でぬ玉なれど
守りて心盡しなバ
世に崇められ愛られん
ゆめ忘れぞな玉研き
老て必らぞ悔あらん
明日ハ光りの失せやらん
研けよ研け玉研け

碌々庵居士曰、通篇總妙、又曰、通篇皆誠、　老巧手、

テニソン氏輕騎隊進擊の詩　、山仙士

一里半なり一里半
並びて進む一里半

死地に乗り入る六百騎
士卒たる身の身を以て
答をなすも分ならず
死ぬるの外いあらざらん

右を望めバ大筒ぞ
共に打出す砲聲い
響の如く凄まじや
猛う立てぞ進むなる
勇んで乗り入る六百騎

將い掛れの令下す
譯を糺すい分ならず
これ命これに從ひて
死地に乗り入る六百騎

前も左りも又筒ぞ
天に轟くいかつちの
彈丸雨飛の間にも
死地にこそ入れ鰐の口

抜けバ玉ちるやいばをバ
きら〳〵と輝けり
大砲方をなで切りす
畑の中に飛込みて
太刀の早業見ごとなり
遂にさゝふる事ならず
馬の頭ぞ立直す
殘るいとゞわづかなり

右を望めバ大筒ぞ
共に打出す砲聲い
皆もろ共に振あげて
敵陣近く乗り掛けて
最と目冷しき働きぞ
烈しく陣を破るなり
敵の軍勢たじ〳〵と
むら〳〵ぱつとむらくづれ
以前に進みし六百騎

左りも後も又筒ぞ
天に轟くいかづちぞ

彈丸雨飛の其中に
死地より出で〻乘り歸す
歸るハ元の一里半
殘るハいとゞわづかなり

あゝ勇ましきものゝふの
手柄ハ永く傳へなん
とる年あまた重りて
頭に霜を戴きて
六百人の豪傑が
そのふる事を語りなば

よに香しき其譽
今のをさなで生立て
腰ハ梓の弓となり
孫ひこやしやで多き時
敵の陣へと乘り入れる
末代までも名ハ朽ちじ

縱橫むじん切り靡〻
鰐の口より脫れ出で
六百人の其中で

詠史

武士の礎としもたゞへつゝ
やまと心のくもりなく
あかさか山にたてこもり
をろしの風にかたぎらば
敵行にけりかの本の
又引かへし攻め來れバ
心極めて櫻井の
子に敎つゝのこしおき
うちしたがへて湊川
謀りし事もあわとなり

姓不詳

其名かれせぬ楠の木の
君につかへて國の爲め
あるは千早に吹をろす
たまりもあいずちりぐ〻と
いやつきしにうちよせて
今をかぎりに死なバやと
里にかはれる言の葉を
其身はやがてつゝものを
そこをふかみて赤心に
消て戰の敗れるも

豫てかくぞと空に滿つ
花と散てし憐れさを
暫時まどろむ夢をさへ
心をつぎて君がため
家に傳へしみたからの
いるてふ事を記し置き
實にたぐひなき丈夫の
國を枕になしてける
傳へ聞くだに身もさむく
碌々庵居士曰、筆々櫻芳、非ㇾ有ㇾ得ニ於文ニ者ㇾ、豈論得ニ
深切如ㇾ此乎、

百廿二

倭心ハ三吉野の
早くも仇の傳へ聞き
驚かなんとむらさもの
盡す心ハたゆみなく
梓の弓のなきかずに
吉野の山のかほれるも
親子はらからのこらぜも
赤き心を今も世に
なりにけるかな哀れ丈夫

日本魂

日本魂其ハ何ぞ
外國人の侮りを
是ぞ日本の心なる

日本魂其ハ何ぞ
棲む人迚も諸共に
是れぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
如何なることの有る迚も

尚今居士

寄せ來る敵を打拂へ
夢にも受ることハ無し
是ぞ日本の心なる

筑紫の端や陸奥に
偏へに盡す國の爲め
是れぞ日本の心なる

割れは亡び合へハ立つ
心合して割れざるは

是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
力の有ん限りにい
是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
國に無學の跡を絶〻
是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ

是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
人々勉め怠らず
國を開きて利を興す
是ぞ日本の心なる

學びの道を盛りにし
智識を以て名を揚る
是ぞ日本の心なる

尊き人も卑人も

家の富めるも貧しきも
是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
道ある者と交るに
是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
相親しみて僻なし
是ぞ日本の心なる

外國人を侮らぞ
彼と是との隔てなし
是ぞ日本の心なる

忠義心を堅く取り
身をば棄てゝも動かじな
是ぞ日本の心なる

日本魂其は何そ
正しき道の刃よて
是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
慈悲の心を擴ろめ
是ぞ日本の心なる
祿々庵居士曰、世人往々論ニ日本魂一莫レ不レ偏而知ニ
此篇一議論適切、筆力亦老蒼、非ニ才
學兼備者一不能矣、

百合香女史

秋の夕

百廿六

弱を扶て強を擊ち
無理非道を亡ぼさむ
是ぞ日本の心なる

幸なき者を憐みて
禽獸にまで及ぼさむ
是ぞ日本の心なる

祿々庵居士曰、世人往々論ニ日本魂一莫レ不レ偏而知ニ
此篇一議論適切、筆力亦老蒼、非ニ才
學兼備者一不能矣、

百合香女史

百廿七

憂き世の塵ハ隔ねど
苔の通ひ路世離れて
松吹く嵐竹の雨
天津乙女や掻き鳴す
軒端にかくるさゝかにの
雲居の月に照り添へて
草の根毎よ夜もすがら
千草の花をあやなして
萬有物を眺むれバ
斯く面白き秋の夜も
夜ハ憂き物と歎ちつゝ
こまも車も音づれぬ
柴の戸扉ぞ住よかる
友なき宿を慰めて
琴の調と聞ゆなり
糸に貫らぬく白露ハ
玉のすだれと見ねにけり
機織の虫の聲高し
明日ハ折りてん唐錦
造化の妙ぞ知られける
衣かたしき獨りぬる
慰め兼ぬる人もあり

一讀仙境に遊ぶが如し

方に是れ眞個の風流

姑しはのめく稲妻の
思ひわびつゝ夕暗に

復古の歌

王政復古のそのかみを
三とせの冬の十二月
みやこの空にたちかへる
世はかりごもと亂れつゝ
鞍馬にひゝくときの聲
星のくらひも三臺の
あかつき暗き鳥羽伏見
錦の御旗ひるがへし

消へて跡なき世の中を
惑ひ渉るぞ憐なり

姓不詳

れもへば凄し慶應の
九日の日をはじめにて
春のひかりもぬばたまの
あやめもわかぬすみ染の
よろひの袖にかゞやくや
影うすれゆくさしぐしの
大内山のやまかせに
大將軍のいでましに

勇氣いやますすらをが
轟きわたる修羅の道
ちしをに染るもみぢばの
仆れかさなるしかばねい
踏しだきゆく戰場の
翳すつるぎのつかの間も
道のはてこそあれなれ
炎さかまく淀の城
煙のすへのかげろふも
のどけき春にうちまとる
かたりつゝ酌むさかづきに

軍よはねるもいかづちと
斬りつ斬られつ阿毘叫喚
赤き心をとりぐに
敵か身方か彼れ誰れ時
習ひ常なきつゆの身と
君をわすれぬものゝふの
天地もうごく震動に
おほへる雲のたちまちに
さえて治る君がよの
昔がたりとすぎし世を
老たるかげもかつ見ゆる

Oha

このうたげこそ樂けれ

凱戰の歌

柳櫻をこき交せし
吹き翻へる日章旗
欣び迎ふ國民の
歩兵騎兵の肅々と

勇む喇叭の聲々を
いさむ兵士にいさむ駒
旗も勇めハ大筒も
勇み〳〵し兵士や

大庭景陽

都の春の朝風に
今日凱戰の我軍を
見渡すはるか彼方より
喇叭の聲の勇ましゝ

聞く國民は氣もいさむ
凱歌の聲も勇むなり
小筒とゞもに勇むなり
喇叭の聲も勇ましゝ

勇む兵士も戰場に
霰ふる日も雨の夜も
火玉飛び來るそが中も
爲と思えばいとゞなを

あな勇ましの兵士や
修羅の巷ゝ出入し
銃と名譽を擔ひつゝ
柳櫻もうらゝかに

ありし辛苦ハ幾何ぞ
氷の刃鉄の
何ゝか厭わん大君の
喇叭の聲も勇ましゝ

國と君とのそが爲に
萬死の中に生を得て
歸る都の春景色
喇叭の聲の勇しゝ

碌々庵居士曰、起首胚胎全篇巧手可レ恐、

軍歌

讀めやよめ〳〵此文を
我日の本に
生れ來し民
たる者ハ肝
銘して居ら
にやならぬ
ぞ諸人よ讀
めやよめ〳〵
此文を

來れや來れいざ來れ
寄せ來る敵は多くとも
死すとも退くと勿れ

すゝめや進めいざ進め
劍は林を爲すとても
死すとも退くと勿れ

姓不詳

御國を守れや諸共に
恐るゝ勿れ恐るゝな
御國の爲なり君のため

彈ハ霰と飛び來るも
ためらふとなく進みゆけ
御國のためなり君のため

勇めや勇め皆勇め
御國を守る兵士は
死すとも退くとなかれ

勉めよ勉め皆共に
汚せしものぞと後の世に
死すとも退くとなかれ

懷へよ懷へ能く懷へ
我身の失せざる其中ハ
死すとも退くと勿れ

劍も彈もなんのその
身は鉄よりも猶堅し
御國のためなり君のため

汚せしとのなき國の名を
言れぬようにと覺悟して
御國の爲なり君のため

神より受けたる此國ハ
人手よ決して渡さずと
御國の爲なり君のため

守れや守れ皆守れ
恐るゝものゝ父母の
死すとも退くとなかれ

恐るゝ勿れ恐るゝな
國をバ愛する兵ものに
死すとも退くと勿れ

進めや進め皆進め
命を惜まず進み行け

異國の奴隷と成るとを
墳墓の國をバ能く守れ
御國の爲なり君のため

民をバ愛する我君と
勝つべきものは世に非ず
御國の爲なり君のため

腐りし心のなきものは
御國の旗を押立て

死すとも退くと勿れ

進めや進め皆進め
進めや進め皆進め
死すとも退くと勿れ

御國の爲なり君のため

御國の旗を押立て
祖先の國を守りつゝ
御國の爲なり君のため

鎌倉の大佛に詣でゝ感あり　尚今居士

今をさることかぞふれバ
六百年の其むかし
建長のころ鎌倉よ
稻多野局が建られし
總青銅の大佛ゝ
相好いとゞ圓滿し
御身のたけゝ五丈にて
見者無厭の尊容は
何れの地にも比類なし
さるに明應四年とや

由井のつなみの難により
磨金仙も雨に濡れ
殆ど此に四百年

余もこのごろ鎌倉の
杖をひきつゝ大佛に
しかと尊顔見上れば
浄き如來の御心は
涅槃てふ語の思ひれて
しばしの間胸の雲
眞如の月の圓かなる

古跡尋ねてをちこちに
詣でゝ心おちつけて
はちすの花もおよびなき
外に見れ何となく
凡夫不覺の余とても
霧れて無明の夢ゝ醒め
影を見たるにあらねども
見たるが如き心地せり

言外に深意あり

夫れ物事のなりたちに
昔し羅馬の帝國い
起りしものにあらずして
家康ひとり德ありて
時勢人情やうやくに
鎌倉山の大佛も
千百年を過ぎし後
鑄ものゝ術も具りて
頓にとゝのふことぞなき
シーザルひとり智を奮ひ
德川氏の繁昌い
成りしものとな思ひぞよ
運びて此に至りてき
浮屠氏の教へ渡り來て
人の信仰厚くなり
初めてなりしものならん

稻多野夫人の時代にハ
精神こめて手を合せ
わが後世をも祈りしも
生れし人ハ然ハせず
昔の事を思ひやり
業をはむるの外いなし
秋の空にも劣るまし

昔の人の是といひし
今日の眞ハあすの僞
非理邪道となるならん

事も今でハ非とぞなる
あすの教ハあさっての
天地萬物一定の

百卅八

此大佛に打向ひ
天下太平安穩と
今の明治の聖代に
佛の面を打眺め
其鑄工の巧みなる
かわれバかハる時勢かな

學者ハ謂へど是を之れ
人ハ果してなかるらん

規律ヨ由りて進化すと
睚と心に認めたる

嗚呼盛んなる大佛よ
からくれなゐのもみぢ葉と
人の譽むるに異ならず
如何に時勢の變るとも
歎賞せざることなけん

六百年もたつた川
流るゝ水を年々に
尊體此處ヨ在ます間ハ
年々人の尋ね來て

無題

碌々庵居士曰、昔人之與ニ今人ハ雖ニ詣則詣ニ矣、觀レ物之情豈得レ無レ異乎

故久阪義助

百卅九

世ハ刈萱と乱れつゝ
蟬の小河に霧立て
うら痛ましや靈しき
實美朝臣季知卿
其の外錦小路どの
旅にしあれば駒さへも
降りしく雨の絶間なく
都ゆしもわさて蘆がちる
ゆめの浮世ハ物かはと
峯の秋風身にしみて
妙法院の鐘の音も

讀む者をして坐ろに懐舊の感を起さしむ

眞に鬼神を泣かしむるに足る

百四十

紅さす日もいと暗く
隔ての雲となりにける
大裡に朝暮殿ゐせし
壬生澤四條東久世
今浮草の定めなき
進み兼つゝ嘶きつ
涙に袖の濡れ果てゝ
難波の浦にからきたし
ゆかむとすれば東山
朝な夕なに聞なれし
何と今宵ハ憐れなる

いつしか暗き雲霧を
拂ひ盡してもゝレきの
みやこの月や見給はん

世渡りの歌

小川健次郎

宜も出來たり實りたり
往來の人も稻のなみ
わけて今年の秋穫を
見れば農はどよき業い
又とあらじな國本も
こゝに基ゐし民命も
愛にかゝると聞からに
釼をうりて鋤をかひ
すき返しても長き日の
腕も肘もぬけそうに
それのみならず霖雨や
早に水のかけ引や
夜の目もねぞに引板の番
さるに一日野も山も
野分の風の無慙やな
泣くになけず取分て

農況殆んど興に遏る

百四十一

世の常なきを嘲つより
嗚呼六づかしの世渡や

商家の内幕を說破する才筆

物うる業ハむかしこそ
國のひかりも身の幸も
非じときけば矢も楯も
輸出輸入の平均や
取もどさんと健氣なる
あへなく外れ幔幕の
賣れば借られ買へば損
きへて果敢なく雲霞

外に詮術なかりける

賤しといへど今の世ハ
もとむる道もこの外に
はや溜らじと投げ捨て
彼れに得られし商權を
胸算用の正鵠ハ
設け處か埒もなく
杖と賴みし資本も子も
あらしの庭の花紅葉

舟子も亦憐むべし

世の常なきを嘲つより
嗚呼六づかしの世渡や

棹一本に浮々と
遊びがてらに渡らるゝ
危險を怯ぢ恐れずに
日頃の伎倆顯はすハ
よるべき蔓を求めねば
共に根ハなきうき草の
誘ふ人なき身の不運
月に嘯き花に醉

外に詮術なかりけり

此處の泊りや彼所の港
舟子も暴風の危險あり
名譽の海に乘り出し
いと易けれど夫とても
よし覺むとも其憂も
憂き艱難をよそに見て
はり裂く胸を押鎭め
流る水を友として

世の常なきを嘆つより
鳴呼六つかしの世渡や

世わたる業ハ多けれど
つきて廻はる謎のごと
おなじ羽色の蝶鳥ハ
其生活ハ習ふより
傍目をふらずひたすらに
又あすよりと工夫して
其熟練の遺傳とに
はげみ進めばおのづから

彼れに利あれば此に害
畔を走るも田をとぶも
れろかな事よ細虫すら
なれし手業を怠らぜ
明日ハ今日より明後日ハ
祖先の立てし計畫と
光りを加へ漸くに
我をしらぜに一日より

外に詮術なかりけり

ひとひと樂に傍目より
鳴呼いとやすの世渡や

祿々庵居士曰、窮通否泰之理、親切周到、說破得
其肯綮、所謂有レ益二于名教一者、至三行
文之自在與二字句之温雅一是此編
之餘事焉耳、

隱子を詠じて學童に寄す

祿々庵居士

草蘆の前の谷川の
ひゞく音色ハ三味線か
琴か胡弓かひるも夜も
清き流れハ潺々と
草木も奥に乘じけり

斷間あらせぜ人のみか

笑むこえを聞く時ハ

後に聳ゆる嶮山の
舞ふやら歌を謡ふやら
舞子が山と稱ふるも

左に繁る竹籔や
囀づるとりの聲さけば
浮世の塵を避て今

名譽利益ハ何のその
睡もさめぬ其のうちに
百花爛熳馥郁と

古さ大夫ハおどるやら
其趣きハ天然の
益し故障ハなかるべし

右に盛なる森の内に
彼れといひ又此れと云ひ
別乾坤の住なり

春のあしたの朝寐して
はや啼き起す鶯や
さそひ慰む樂しさよ

さぞや都の人々ハ
此處の溜る碌陰や
席をうつして身を休め

猛烈しき熱に堪へざらん
彼所の涼しき壑底に
午睡するさへ意の如し

柴の扉になく鹿の
聲も哀れとなりぬれば
花に勝りし紅葉見や
ひるをあざむく月みんと
杖に信してをちこちに
逍遙するも忙ハし

殘るくまなく銀世界
かれ木も六ツの花盛り
眺めも清きさよらかな
けしきといへど賞賛られぬ

見よ今人と同じと

ああ嗚呼童子よ此文ハ
時勢に暗き頑愚なる
春夏秋冬ニ一ト日だも
況んて雪見の諷言ハ
價あるぞや童子よ
春夏秋冬ニ一ト日だも
草木も眠る丑三ツを

寒村夜歸

小川健次郎

うはべばかりが銀世界

いと大切なしるたぞよ
支那の古風の隱子さへ
怠るひまハあらざるぞ
吾等にとりて千金の
支那の古風の隱子さへ
怠るひまハあらざるぞ

小川健次郎

なれし道とて只ひとり

然讀て自ら凄

遠寺の鐘の音凄く
我を襲へる九折
洩來る月の片われハ

聲より外に友もなし
住めば都の鬧がしさ

問感々々

權貴の門にへつらひて
まけぬ重荷を負ひ擔ぎ

小笹を渡る夜嵐の
登るも暗き杉村を
何地なりけん梟の

斯る淋しき土地なれど
車の塵もかゝらねば

名利に追ハれ牛馬に
我と我身に使はるゝ

苦痛ハしらで春の花
秋ハ鹿の音月雪と

我もの顔にもてあそぶ
自らゆるし友も亦

貴人も知らぬ快樂の
謳へば返す谷の山彦

是れ眞の快樂なるか

社會學の原理に題す

宇宙の事ハ彼是の
規律のなきハあらぬかし

山仙士

別を論せず諸共に
天に懸ける日月や

多き此身を神に謝し

夏ハ螢や郭公
四時おり〳〵の景物を

身は昭代の棄材ぞと
瓢一ツに王公や

微かに見ゆる星とても
いへる力のある故ぞ
又定まれる法ありて
且つ天体の歴廻れる
必ず定りあるものぞ
地震の如く乱暴に
一に定まれる法ハあり
地をハふ虫や四足や
其組織より動作まで
又萬物ハ皆共に
あらざる物ハなきぞかし

動くハ共ゝ引力と
其の引力の働きハ
猥りにひけるものならず
行道とても同しこと
又雨風や雷や
外面ハ見ゆるものとても
野山に生ふる草木や
空翔りゆく鳥類も
都て規律のあるものぞ
深き由來と變遷の
鳥けだものや草木の

別を論せぬ諸共に
遺傳の法で子に傳へ
適せぬものゝ衰へて
枯梗かるかや女郎花
牡丹に縁の唐獅子や
木の間囀づる鶯や
雲居に名のる杜鵑
友を慕ひて奥山に
譯も分らで貝の音に
羊に近き猿はまだ
靈とも云へる人とても

親に備へる性質ゝ
適するものゝ榮えゆき
今の世界に在るものゝ
梅や櫻や蒜牡丹
菜の葉に止まる蝶〳〵や
門邊にあざる知更鳥や
同じ友をゞ呼子鳥
紅葉ふみわけ啼く鹿や
追ゝれてあゆむ牛羊
愚なことに禽物の
今の体も脳力も

元を質せゞ一樣に
積みかさなれる結果ぞと
見極ゝめたるゝこれぞこれ
優すも劣らぬ脳力の

これに劣らぬスペンセル
化醇の法で進むのゝ
動物而已にあらずして
活物死物夫而已か
區別も更になかりしを
感ずるも尚あまりあり
思想智識の發達も

一代增しに少しづゝ
今古無双の濶眼で

アリストートル、ニウトンに
ダルウヰン氏の發明ぞ
同じ道理を擴張し
まのあたりみる草木や
凡そありとしあるものゝ
有形無形夫〳〵の
眞理極めし其智識
されゞ心の働も
言語宗旨の改良も

社會の事も皆都て
既にものせる哲學の
生物學の原理やら
土臺となして今更に
書にものさるゝ最中ぞ
そも社會とゝ何ものぞ
其結構に作用に
種族と親と其子等の
男女の中の交際や
取扱の異同やら
違ひの起る源因や

同じ理合のものなれバ
原理の論ぞ之に次ぐ
心理の學の原理をも
社會の學の原理をバ
此書に載せて說かるゝハ
其發達ハ如何なるぞ
社會の種類如何なるや
利害の異同如何なるや
女子に子供の有樣や
種々な政府の違ひやら
僧侶社會のある故や

其變遷の源因や
智識美術や道德の
遷り變りて作醇する
論述なして三卷の
最とも目出度美擧にこそ
讀たる者ハ誰ありて
實に珍らしき良書なり
何から何とせいをやく
走り書やらからしやべり
天下の事ハ一と飮みと
新聞記者や演說家

儀式工業國言葉
時と場所との異同にて
其有樣を詳細に、
長き文にぞせらるべき
既に出でたる一卷を
此書を褒めぬ者ぞなき
社會の事に手を出して
責任重き役人や
舌もまハらぬくせにして
法螺吹き立てゝ利口ぶる
此書を讀みて思慮なさバ

人をあやまる罪とがの
月日の事や星の事
夫等の事ハさて置きて
疊一枚させバとて
長の年月年季入れ
出事る事にハあらざるに
年季も入らぬ學問も
新聞記者や役人と
か樣な者が多けれバ
尚ほ恐ろしき虛無党の
揉めに揉めたる其上句

少しハ減りもするならん
動植物や金屬や
凡そ天下の事業は
足袋を一足縫へバとて
寐る眼もねずに習ハねバ
獨り社會の事バかり
するに及バぬ譯なれバ
成るハ最と〳〵易けれど
忽ち國に社會党
起るハ鏡に見る如し
虻蜂取らぬの丸潰れ

秩序も建たず自由なく
再び浪風靜まりて
百年足らぬ掛らんハ
有樣みても知れたこと
忘りに手出しする勿れ
廣き世界の其中に
盲目同士の戰に
覗ひきまらぬ棒打の
今の世界ハ旋風
烈しき中へつい一寸
足も据ハらぬ瞑眩き
泥海にこそなるべけれ
大平海となる迄は
革命以後の佛蘭西の
そこに心が付きたらバ
忘にしやべること勿れ
恐るべきもの多けれバ
越したるものハあらぬかし
仲間入りこそあやうけれ
烈しく旋る時なるぞ
絡き込まれたら運の盡
頭ハいとゞぐらつきて

くる〳〵と廻ハされて
上句のハてハ空中へ
初て悟る其時ハ
後悔先きに立ぬなり
其吹く中へ過ちて
上手とこそハ云ふべけれ
興論を誘ふ人だちハ
能く愼みて輕卒に
碌々庵居士曰、意至筆至論復至、可レ謂二三絶一、又曰
舉二社會學之大綱一盡矣、又曰、末段
諷諫適切、使讀者改容、

すき間もあらせず廻 されて
絡さあげられて落されて
早遲蒔の辣 椒
颶風烈しく吹く時ハ
船を入れぬが楫取の
政府の楫を取る者や
社會學をバ勉強し
働かぬやう願ハしや

春の眺め

春の景色を見渡せバ
吹く春風の暖かさ
鳴く鳥の音の長閑さよ
袖を拂ひて人に媚び
我を招くの風情あり
最と〳〵操を增す鏡み
人も興にや浮かれけん
或ハ菜の葉に戯れつ
見れバ眼を喜ばし
西に東に耳に聞き
春色見るが如し

子有樵夫

四方の野山の雪融て
咲く花の香の芳しさ
梅ハ笑を含みつゝ
柳ハ風に靡きつゝ
松ハ常盤の色變へて
雲雀も蝶も黃鳥も
木の間青空囀づりつ
野邊に黎の杖曳きつ
聞けバ耳根を樂まし
北に南に目に觸るゝ

初音も緑も黄金なる
心を慰めざるハなし
愛つべきものハ多けれど
眺めハ爭ひ忘られん
詩にも歌にも巧みなる
得こそ寫さじ此狀ハ
唯り占むべきものならず
何つ何れにて見らるべき

送二學一友ノ歸一鄉ヲ一歌

大竹美馬

五年六年諸ともに
互に勵みはげましつ
錦の色も皆な共に
夏秋冬ノ眺めにも
別けて東風吹く春の日の
如何に書に畫に又文に
風流才子なれバとて
左ハ言へ春ハ天地のみ
我身の春の來るときハ
早く見まはし聞まはし
同じ學びの窓の内に
慰められつなぐさめつ
光りのどけき春の日や
五月雨晴れぬ夏の日も
いとゞ樂しく過しさり
月かげ清き秋の夜や
雪ふりしきる冬の夜も
いとゝうれしく暮しけり
五年六年とく立ちて
學びの舍を出たりし
ともなり師なる君達の
祝の酒をすゝむなり
いざやくめ〳〵此酒を
歌へや舞へや皆共に
舞へや歌へや諸共に

今日を限りぞ明日よりハ
敵といふハ忌言葉
難きも難き事ならぜ
聲をバ雲井に上るなる

さハいへ心有明の
行衛思へばうたてやな
天と地との間をバ
隔てハあらじ西東

同じ圍居の友人よ

又逢ふ事の易さやハ
雲をも排く心あらば
月の前ゆくはとハぎす
あれ見よ高く上るなる

月影かくす村雲の
浮世の事に似たる哉
家となしつゝ過る身ハ
北も南もみな同じ

雲になやめる月を見よ

朝顔ニ寄テ学童ヲ励ス圖

浮世の事ハ何事も
さりとて心おくらすな
斯くして後に思ふ事
風ふき拂ふ雲間より

思ふまゝにはならぬ共
耐へよ忍べよ怠るな
かなふ者とや見よや人
月ハ出たり顯ハれたり

嗚呼面白の景色やな
明日の別れのいとつらき
取れや人々酌む酒の
深き契りを忘るなよ
月もろともにやすらはで

そゞろうき立つ思哉
愁を掃ふ玉はゝき
つきぬためしも有磯海の
寐ねずにあれや今宵一ト夜
歌へや舞へや明るまで

碌々庵居士曰、毎一句押一韻、巧一穩ニシテ而秀一潤、能ク發ニ揮ス

其ノ眞ノ情ノ筆ノ墨ノ鏗ノ鏘ヽ

朝貌の花に寄せて學童を奬勵す　小川健次郎

庭のかきねの朝貌よ
朝な〳〵にれこたらず
咲くも盡ぬ其花の
色といひ又形まで
同じ天地の恵みにて
我等の目をゞ慰さむる
深き心の白露の
干をも知らで寐くたるゝ
人こそ花に劣るらん
學びの兒よこのゝなに
負けず起出で機嫌能
貌打洗ひ父母と
我身の無事を神に謝し
庭の面のゝきさうじ
椽や襖の拭きゝらひ
怠らぬやうつとめよや
やがて汝の實も花も
此朝顏にもまさるべし

此邊の數句數讀以て肝銘すべし

庭のかきねの朝貌の
朝な〳〵に咲理由や
咲たる花の其色に
白といひ又赤青と
異なる原因や其外に
我等の目をば慰さむる
心理の法や白露の
結ぶ作用をしらで過ぐ
人こそ人の甲斐なけれ
學びの兒よ此問を
疑ふならバ躊躇せゞ
普通の學を疾く課へて
精神論や物理學
夫から夫と研究し
化醇の律をあきらめて
學士哲士と呼ばれたら
幾春秋の年月を
樂しき中に送るべし
今を蕾の汝の身
露の散る間も怠らず

勸ㇾ勸に改む如何

勸めて徒に過ぎるなよ蕾に似たる學の兒

四時

一管の筆頭能く百日の春を寫す感服々々

出でよ人々春の野に菜種のㇾなも盛なり浮れ遊ばぬものもなし摘め〳〵菫をとめ子等

口頭此句を吟すれㇾ全軀既に十分の涼を覺ふ

涼みに出でよ河原まで月おもしろく照すなり鼓打つにや河の水

花によく似た蕾の兒

大和田建樹

れんげの花も盛りなりうたふ黃鳥舞ふ蝴蝶抜け〳〵茅牙うなゐ子等あらおもしろの野遊びや

風心地よく通ふなり琴を彈くにや岡の松暑ㇾ浪に流れけり

其寂寥を寫さゞして却て其盛觀を擧ぐ亦是れ一種脫俗の新案

散れ〳〵夜露我袖に月をうつして翳さまし

行けや友達秋の野ㇾ桔梗かるかや女郎花人待顏に靡くなり吹きな乱しそ夕嵐

ふれ〳〵小雪ふれ小雪垣根の竹も撓むまで翳や子ども花翳せ銀の世界に成りにけり

今こそ盛り花盛り萩もすゝきもたよ〳〵と踏みな荒しそ草苅等明日も來て見ん此花を

向ふの松も隱るまで拾へや子ども玉拾へあちをもしろの雪景色なほ降れ小雪あすまでも

刺客を詠ぜる詞

天を仰げバいと廣し
その中に住む人にして
狹き心のひとすぢに
ゆゝしき事や起らんと
やがて病にかこつけて
時ハ花散る春風の
それと言はねど父母よ
厚き恵も報ひ得ず
うからはらから友がきよ
おもひ煩ひかき殘す
地見みわたすも亦廣し
なぞか心の狹かりし
この人あらバ世の爲に
思ひわびけん朝夕に
勉めしわざも打棄て
なでやの里に歸り來て
是ぞ此の世のおわかれよ
先だつ罪は免してよ
告げんとすれどつげがてに
心は盡さぬとる筆に

八門奇者

今日春雨のふる里を
頃も經ぬして稻葉山
識る人とていながら川
尋ね問ふべきよしもがな
憎さもにくしかのかたき
下なる民をそゝのかし
上を崇むる人をしも
下にへつらひ民にこび
薩摩の瀬戸に幾千々の
うてたくはあれど君がため
國のみいづを振はんと
もはやたち出る旅ごろも
ふもとよ着きぬ嬉しくも
おもふかたきにあふ瀬をバ
とく揮まはしこの白刀
非ぬ望みを胸にをき
上の掟を言あバき
訛ふものと誘れども
ねぢけいでたる彼等ども
人を沈めし浪風も
高麗もろこしも討鎭め
思ふ餘りの其の結局

憎むべしとも覺ゆれど
是れに引かへ彼のともは
彼の蠢けき佛蘭西の
首斬り臺に國王を
いと淺ましくふるまへる
口をひらけば鮮血もて
かゝる勢ひつのりなば
いで大君の御爲に
左はさりながら彼の人の
つき從へるにせものゝ
とよもかくにも彼の人の

思ひかへせば可惜ひと
世の正道を亂さんと
血の波たちし禍津世の
ひきすへたりし此時の
あとに心やとまりぬる
世を洗はんと叫ぶなる
危からまじ大君は
斬り斃してん彼の人ゝ
誠にかくも思へるか
安にしかはいふなるが
心のうちを知らんとの

願ひかなへてまのあたり
心の中ゝいかなりし
かくし持ちたる匕首を
待つとゝさらに彼の人は
鼻高らかにしづ〳〵と
何故ありてかくすると
問ふは愚よ汝こそ
閃々刃はゞばしる
此のますらをの眞心の
よしやうらみゝ遺るとも
ふみにしるして音高く

あんせつさゝし其時の
今ゝ少しもゆるされじ
袖の裏にて抜き放じ
神ならぬ身の思はねば
歸る跡より飛びつけば
言はせも果てゝ何故と
今將來の國賊と
問ふは愚よ汝こそ
血しほも赤き心なる
貫かざるぞ怨みなる
なはきろの名は世の人も
語りつぎなん子世までも

されど敵と見ひがめし
すくなきまでにあつかりき
國につくせるこゝろざし

シェーキスピール氏ヘンリー第四世中の一段

ヘンリー四世そのはじめ
一旦謀反くわだてゝ
リチヤルド王と戰ひて
自ら立ちて王となり
天のいかでか亂臣を
禍亂突も起り立ち
ウエールス人も蜂起せり
ランカストルのヂウクたち
六萬人の將として
王を俘になしたれば
四方に逆威を震ひしも
安穩にてゝ置くべきや
戰爭止むとき更になく
スコット人も攻め入れり
其の紳士は世にためし
君に忠なる志し
この一篇のこれぞこれ
是れぞこれ。ヘンリー
四世のありさまを。寫
せし歌の引
として。、
山仙士が手
にかゝる。
名作なるぞ
名文ぞ。輕
々看過するな
かれ。

ペルセイ一家叛逆す
其數いとも多かりき
王に烈しく抵抗す
王の人望失ひて
其晩年に至りても
心で心責められて
なすことならぬ苦しさよ
そのありさまを寫したる
廣き世界のその中に
ヘンリー四世ならざるも
王を暗殺謀るもの
議院の權理打ち守り
財政いとも困難し
健康漸く衰へて
自ら悔ゆる其惡事
安眠とても片時も
此一篇のこれぞこれ
シェーキスピールの名作ぞ
王者の數の多けれど
幾人ありや聞かまはし

、山仙士

最と下賤なる我人の
今しも眠る其數ゝ
あゝ羨しうらやまし
天より我に賜はりて
如何なる罪の祟にや
たとへ暫時の間なり共
瞼を閉ぢて眠らんと
そも如何なれバ眠神
くすばりかへる藥の床
心地もよげに横たはり
とびくる虫の羽音さへ

枕を高く高いびき
幾千萬かあるならん
眠の神よねむり神
伽するとこそ云ふべけれ
眠の神に見ゝなされ
胸の苦しさ忘れたき
如何にすれども眠られず
見る影もなきあバら家の
むさ苦しきも厭ゝぞに
枕のほとりぶん〳〵と
眠りを誘ふ助にて

すや〳〵眠るものなるに
床の上なる天蓋は
眠を誘ふ樂の音ゝ
貴人高位の寢屋までは
實に愚なる神ぞかし
不潔な床に横たはる
王者の床に來らぬぞ
比べものにゝあらぬのを
ゆら〳〵ゆるゝ帆柱の
水夫の目をば閉ぢさして
吹き來る嵐凄まじく
伽羅沈香を炷き立てゝ
金襴緞子以て作り
最と心地よく聞ゆなる
何とて來ることのなき
何故にかく見苦しき
下賤な者と寐ゝするも
金の時計と號鐘と
はていぶかしき神の意ぞ
高き上にも安く寐る
情け用捨も荒浪や
うづまく浪をまき上げて

天地とゞろく浪音は
下ハ無間の地獄なる
浪にゆらめき眠らする
総身水にひたされて
斯く騒しき其折も
臭末も眠る丑満に
手を替へ品を替ゆるとも
依怙贔屓なる神にこそ
寝ろや眠れや羨し
冠着たる頭程

シェークスピール氏ハムレット中の一段

死人も覺むる程なるに
高き柱の其上で
神の力ぞ不思儀なる
身を粉に砕く水夫には
眠の神ハつきそふに
眠を誘ふ其工風
王者の傍に來らぬハ
あゝ幸多き賤の身ハ
つら〳〵思ひ合ハすれバ
苦しきものハ世にあらじ

ながらふべきか但し又
妾が思案のしどころぞ
これに堪ふるが大丈夫か
深き遺恨に手向ふて
どふも心に落ちかぬる
眠ると同じ眠る間ハ
あらゆるうきめ打捨つる
アゝしぬ 唖るねむる時
ハアこたわりが有るようぢや
無常の風にさそハれて」

尚今居士

ながらふべきに非るか
運命いかにつたなきも
又さハあらで海よりも
之を晴らすがものゝふか
扨も死なんか死ぬるのは
心痛のみか肉体の
是ぞ望のハてならん
萬が一夢みるならバ
なせと曰ふに死に眠り
此娑婆離れしまふとも

いかなる夢の來るや
うき事長く忍ぶのも
九寸五分さへもちたれバ
事をすやすやすけれど
強者の非道世のそしり
想ふ美人の不深切
貴人の無禮又たとひ
輕しめらるゝ是をこれ
重荷を負ひて汗流し
暮せぬ暮し暮すのも
死後の恐れがあるからぢや

ハテ疑の晴れぬのも
これが爲めかや何故なれバ
その切先でひとつきに
之をバ爲さず愼みて
驕れる人のかづかしめ
緩みすぎたる國の法
いかに善しとも下人の
瑕へ忍ぶのか何故ぞ
ういめつらいめこらへつゝ
亦何故ぞ是かみな
死出の山路の不思議なる

登りて歸る人ぞなき
物すごくこう思はれ
うきかんなんを嘗るとも
斯くと心に思ふ故
いかなる深き大望も
實のなるとぞなかりける
アヽたをやかな其風情
わしが罪障わびてたべ

如何なる事のあるやらん
たとひ此世に止まりて
あの世の事か恐しや
たけき心も弱くなり
花を開かぬ枯れ失せて
左かさりなからオヒリヤよ
そなたか神をいのるなら

超絶敬服々々

ホーヘンリデンの戰爭の詩

山陰樵夫

日か早や西に入相の
鐘かかすかに聞へつゝ
イーザー河の音高く

百七十九

流るゝ水ゝ物凄く
新に積る雪のとこ

只聞くものは村遠く
夜ゝいと爛けて見ゆる頃
すは事ありと大将ゝ
暗きを照す明りをゞ

喇叭の聲や火把の
整頓したる騎馬武者ゝ
手荒き馬ゝ恐しく

凡て新手の兵は
餘愈もなくぞ臥し居けり

犬の長吠する聲ぞ
不意に打ち出す大鼓の音
墨なす空の冬の夜の
付けよ〳〵と命じけり

明によりて速かに
玉ちる劍扱き連れつ
身の毛もよだつ饗應に

預らんとや勇み立ち

名譽に充てる軍馬をゞ
音は恰ら雷の
震ひ崩れつ鳥羽玉の
千々の電びか〳〵と

秋の紅葉のそれならで
ホーヘンリンデン岡の上に
瀧つ瀬をなすィーザーの
殺伐悲愴の有樣は

いとも雄々しく斷けり

敵の陣屋へ乘り入るゝ
轟く如く山岡も
暗夜に閃めく大炮は
まばゆき迄に光りけり

唐紅にまだらなす
輝る電ゝいや赤く
流るゝ音ゝいや高く
いと凄じく見へにけり

漸やく明る朝ぼらけ
鯨波を作りて突き進む
眞一文字に天ぎらふ
さし輝る旭兵ハ

燦たる軍旗なびかせつ
勇み乗り入る輕騎隊
古今無双の軍功を
両軍既に入り雜り

森を離るゝ雀色
猛烈敢死の兩軍を
八重棚雲を押し分ける
榮譽をこそハ表しけり

撃てよ進めの命令に
屍を塚にうづめんか
建てゝ名譽を博せんか
酬とこそ見られけり

名も世に高き佛軍か
男子と生れし甲斐もなし
流る血汐に此恥を
憤り激せる兵ハ

不意を撃れし遺憾
いざ諸共に身を屠して
潔く雪いで呉れんぞと
勝利の程ぞ預知けり

さしもにつよき奥軍も
如何で望を達すべき
降り積む雪ハ兵の
踏轟ゝなす芝泥は

死を定めたる負傷猪
却て敵に逆撃たれ
身の廻り纏ふ衣ぞや
長く睡らん墓場なり

碌々庵居士曰、最末之二句、結得妙甚、

櫻の歌

大庭景陽

勤々筆々

然り〳〵

轉得妙甚

我國まもる武士の
朝日よにはふ山櫻
左近の花に風吹かバ
樂とり直して守るべし
其色其香たゞなるも
花散る事はなさぞかし
聖帝の大御代と
櫻花こそ愛たけれ
夜る行宮にしのび入り
赤き心を墨染の
世にも稀なる忠烈は
大和心を人問はゞ
咲くや霞も九重の
守れや〳〵武士よ
櫻は忠義の花なるぞ
浮薄の風にさそわれて
千春万春動かざる
共に世界に例しなき
昔し兒島の三郎は
十字の詩をも作りなし
花と其香を競ひける
鬼神とても泣かんめり

去れバ今尚武士が
三嗣如き忠臣を
帝に仇する者あるか
忠義の劍ふりかざし
國平らげく安らけく
廣き世界に輝かし
千萬春を迎あんと
我武士の忠烈は
櫻と共に例なし
花見るたびに古の
羨みしたひ慷慨し
國に敵する者あらば
只一打にさり倒し
聖帝の御威徳を
櫻の花ともろともに
やたけ心のいや勝る
櫻と共に例なし

緑々庵居士曰、句や筆々、忠香櫻芳、

童子勸學の辭

落花居士

取て童子を
言ハせして
一般の人と
云ふ是れ歸
納の論辨か

此世に生る人々は
生れ得たるの天質は
勉めよハげめ我童子

貧しき家に生るとも
尊き人の子たりとも
勉めよハげめ我童子

汝が常に羨やめる
帶ぶてふ人ハ年や經る
勉めよハげめ我童子

貴賤貧富の別あるも
磨けバ晴るゝ玉の雲
よく守りてよ師の教

學び次第で富みやすし
學び次第で卑やしまる
よく守りてよ師の教

胸に輝く勳章を
苦辛ぞしけん讀み書を
よく守りてよ師の教

櫻ノ宮ノ圖

View of Sakura-no-miya.

玉の樓臺に住居して
殖生の小屋に屈りて
勉めよいげめ我童子

譽を得んも名を擧も
心根痩せて苟も
勉めよいげめ我童子

錦をまとひ常日頃
繻纓をきるのも唯心
よく守りてよ師の教

幹ありてこそ開く花
美し結果を望もかな
よく守りてよ師の教

世に君子とも大人と
稱をあつめ月の窓
仰ぐる人の古今とも
其苦の知れぬ數ふとも

勉めよいげめ我童子

全篇を収結し得て妙

斯の如　くに呉々も
言葉を盡し勧むるも
勉めよいげめ我童子
よく守りてよ師の教

小楠公決死の歌

正平四年正行は
四條の隆資卿を經て
先臣正成勤王の
打滅して先帝の
その後天下又乱れ

よく守りてよ師の教

くり返しつゝ理を極め
國の爲なり汝の爲め
よく守りてよ師の教

橋本謙作

芳野の皇居に參内し
心の中をぞ奏しける奏しける
軍を起し朝敵を
叡慮を安め參らせし
逆臣尊氏筑紫より
都をさして攻上り
終に津の國兵庫なる
戰死をこそいと遂げたりき
其時正行漸やくに
軍の場へは伴はで
敵を亡し我君の
遺し訓へし言の葉い
然るに正行今は早や
今に及びて朝敵を
いつをか待ん人の身い
病の爲に死しもせず

正成覺悟や定めけん
湊河にていさぎよく

十一歳になりぬるを
河内へ送り歸しつゝ
御代になせよと細やかに
今尚耳に留まれり留まれり
年も壯となりければ
打亡さで過しなば
思ふに任せぬ習にて
君の爲にい不忠なり

父の爲にハ不孝なり
されバ此度師直と
彼が頭を正行が
頭を彼に取らるゝか
雌雄を定め申すべし
今度の軍正行が
今生にては今一度
申しも敢ず涙をば
義心氣色に見ゑたりき
天子御簾をバ揭げさせ
此程數度の戰ひに

何ぞ勇壯なるや

手痛き軍を仕り
手に打取か正行が
二つの中に戰ひの

必死の覺悟に候へバ
龍顏拜ませ玉はんと
鎧の袖に注ぎつゝ

近く召れて正行よ
敵の勇氣を摧しは

叡慮を慰するに足ぞかし
父子累代の勳功い
朕は汝を股肱とす
王家の重きに任せんと
正行首を地に着けて
思ひ定めて退ぞきぬ
斯くて一族郎黨と
參りて御暇を申上げ
各らの名字を書き連ね
兼て思へば梓弓
記し留むと鏃もて

深く感ずる所なり
必ず命を全ふし
長き詔とありければ
是を最后の參內と

後醍醐帝の御陵へ
如意輪堂の壁板に
又其奥に歸らじと
なき人數に入名をバ
一首の歌を書き殘し

芳野を出て勇ましく
碌々庵居士曰、全篇巧手可レ愛、就レ中中段最妙、讀至二其段一、不レ逆レ涙者夫禽乎將獸乎、

新案いろは歌　一山居士

今ハ昔と異なりて
恥ぢも譽れも學問を
程に報ひの影なるぞ
迚も身の浮く瀬ハあらじ
利害の程を明らめよ
類を離れて學バぞバ
我身からなる錆を衣て
祿も位も智慧次第
日夜に闘み怠るの
平生遊び暮しなバ
千々に思ひを廻らして
擢んでられぬ其中に
老て悔ふとも詮あらじ
唐に和に古くより

百九十二

妙甚

世に捨てられし人々の
練磨を忘るゝことなかれ
培かふことの無かりせバ
名ハ末代の身の紀念み
胸に置く手の裏表
井に住む蛙ハ白糸の
多くハ變り進行く
闇みも月夜の電氣燈
蓋し古人の見聞きせバ
此開らけ行く世を知らで
手を袖にして只管らに
例しハ數多あるぞかし
園の梢も花も實も
根葉諸共に枯れぬらん
樂も苦も皆な其元ハ
有爲轉變の世の樣を
望みも細き淵も瀬と
陸に蒸滊車海に船
待つ間程なき電信機
不思議と言ふの外あらじ
益なきことにのみ泥ぞみ
遊び暮らせる人々の

百九十三

澤なるとこそ悲しけれ
行末憂ふる輩らへ
見めし言ひめし學びめし
エビシデさへも習ふ世ぞ
採めよ採まれよ内外との
進めよ人々覺よ皆な

護國の歌

汝等朕の肱股ぞと
義ハ山岳も竟ならず
護れや守れ軍人

來れよ來れ同胞らの
盲も啞も今ハ皆な
加之ならず稚兒の
卑屈の眠り疾く覺まし
世故人情に文に武に

姓不詳

最とも愷きみことのり
死は鴻毛と覺悟して
皇國を護れ諸共に

我を育てし父母の
父母に孝ある者ならば
護れや守れ軍人

國の大事に死するのは
水火の中も何のその
護れや守れ軍人

寄せ來る敵の多くとも
旭のみいた押したて、
護れや守れ軍人

墳墓の國とハ此國ぞ
死して忠義の鬼となれ
皇國を護れ諸共に

兼て覺悟の前なるぞ
忠義と名譽を盾にして
皇國を護れ諸共に

當る鋒き强くとも
一步も後に退かず
皇國を護れ諸共に

二千五百有余年
汚せし者ぞと後の世に
護れや守れ軍人

丸は霰ととびくるも
大和魂あるものゝ
護れや守れ軍人

剣も我身にたちはせじ
皇國を護る兵ものゝ
護れや守れ軍人

汚れしとなき國の名を
笑れぬ樣覺悟して
皇國を護れ諸共に

剣は林をなすとても
恐るゝとはあるべきぞ
皇國を護れ諸共に

丸も我身はとをしゑじ
身ゝ鉄よりも尚堅し
皇國を護れ諸共に

以下稳にして巧

昔よりして今までも
國を愛する兵ものに
護れや守れ軍人

文明開化の春風に
我敷島の山櫻
護れや守れ軍人

民を愛する大君と
かつべき者ゝ世にあらじ
皇國を護れ諸共に

今を盛りと咲き匂ふ
異國の嵐に散さじと
皇國を護れ諸共に

昇る旭と國の名を
千代も八千代も萬代も
地球の上に輝かし
香しき名を殘さんと

護れや守れ軍人

題 秋（西詩和譯）

望月秋太郎

早やさしにけり秋の影
そよ吹く風に飜へり
苔のあからみいと深き

賤の小家の靜けさへ
浮世の塵をよそに見る
時つく遠き鐘の聲

夏の綠も消へはてゝ
皇國を護れ諸共に

庭の木の葉ハちりぐゝと
草屋を囲む垣の面の

千ひらの金に勝るなり
此かくれ家に聞ゆるハ
山々深し秋のいろ

谷の水際に咲き殘る
色いとゝめて哀れなり

秋の景色となるにつれ
谷間を越ゑて諸共に
黄昏時になるまでも

今われ愛に唯ひとり
移り傾く日の影に
猶幼げに見ゆるなり

小草の華の紫も
時ハ來にけり去年迄ハ
登り遊びしあの山に

待てども更に聲ハせで
健く幼なき面さしの

起首人の意表に出づ

移りきへ行く夕日影
西の山端のくれなひの
黄昏暗くなるまでも
碌々庵居士曰、句々愁殺、含二無量一感懐一

湘南秋信

昨日けふと思ひしも
旅にいなれぬ苦しさよ
雲の通路斷えゝなるゝ文の面
あすは來にけん友便り
偶にゝあれど其さへも
有るものとてゝ無りけり

鈴木券太郎

獨り行む戸のそとに
色もいつしか消うせて
早一月の旅衣
眺むるものゝ空の雲
斷えゝなるゝ文の面
あさては又親や妹
要事のけては何もかも
おいて王子の紅葉だも

いかに見物か其とても
泣になかれぬ兎や角と
知るや知らずや秋の霜
哀れを見舞ふ氣合なり
あるゝ馬入に馬を倡
大和心のやる瀬なき
都の人にしられんも
今年のみのり豐けさよ
來るや春の事までも
君が代なれや有がたし
田舍の住居にし然かも

想ひやるのみ詮すべも
繁し暮すゝ愚かゝるも
千草にかゝる照月も
木の葉の落る音づれも
また　雨降に雨に孤
思案なげ首池の鳧
外にゝあらじ是いそも
民の命のかゝる紐
嬉しく思ひ云まくも
白きを語る丹の肝
露の恵みの深さにも

酔ひて管まく其代り
晴民評曰、句精巧、押韻自在、敬々服々、

案山子

碌々庵居士

玉や錦のよそおひを
いとゞあわれにやれ笠と
うきかん難も嵐また
ものともせずに毅々として
風を自然に備ふるハ

そも〳〵更にふかしぎの
一寸と一ト筆簡短ニ
輕視されざるその原因を
書き顯すハいと強き
弓を彎しハ眞の勇
その又世俗ヲ避たよに
得たりし顔の容貌ハ

其仁智勇を一身に
夏の耕すそれのみか
守り〳〵て晝ハ鳥
秋のみのりハ穫々と
穫々稻のなみ〳〵つ
見れバ今年の秋獲も

ひいてうたぬハ仁者なり
田野に立て唯ひとり
畑を樂しむ智者ぞかし
たもちて春のたねまきや
總て田づくり農業を
夜ハけものをおひのけて
往來の人も稻のなみ
是皆案山子の仁惠なり

いや事ずみとなりぬれバ

其功績と仁恵なる
墓や路傍に打棄てゝ
刑に處すやら撲壊と
世のならわしと云ひながら

嗚呼案山よかこちすな
斯る非道のあつかひを
汝ぢひとりにあらざるぞ
人にうとまれ讒せられ
或ゝ地下に逍遥ず

そちに告へきことぞある
うけて挫けず撓まぬゝ
古來有爲の人だちが
或ゝ配所の月に酔ひ
其數かぞへ盡されぬ

事を忘れて溝叉ゝ
或ゝ擯て炮烙の
なして腐らし朽させる
あわれ無慙の仕業かな

左ゝ去ながら諸人よ
此世の事ゝ何も角も
とゝ云へ心まめやかに
勤めて後に思ふ事
のどけき春となりぬれば

春の花

春の景色を見渡せば
花なき里ぞなかりける
色香愛たき其花も
憂き事のみぞ多かりき
雪降る夜にゝ枝を折り

可惜とびちる花を見よ
思ひのまゝにならざるぞ
耐へよ忍べよ怠らで
仕遂げ得らるぞ見よや人
花の香清く咲ぞかし

龍溪學人

野の末山の端までも
今を盛りに咲き揃ふ
過ぎ越し方を尋ぬれば
霜降る朝にゝ葉を隕し
枯れしとまでに眺められ

集ひ會ふ憂きことの
耐へて忍びし甲斐ありて
斯く咲き出るぞ愛たけれ
其の身の上に喜の
知りなバ何か憾むべき
春の花こそ愛たけれ
碌々庵居士曰、句々珠玉、筆々寫眞、敬服々々、

熊本籠城の歌

西も東もみな敵ぞ
寄せ來る敵ハ不知火の
世にも名高き猛ら夫の

積り〳〵し其中を
のぞけき春に巡りあひ
世の爲にとて書てレ
花のつぼみハ憂き事と
春の花こそ例なれ

大庭景陽

南も北もみな敵ぞ
筑紫のはての薩摩方
たけり狂ふて攻め來り

西九州に名も高き
敵の總督隆盛は
之に從ふ大將は
中にも逸見十郎太
其外兵士二三萬
進み打出す砲聲に
天地は崩れ山河は
動かぬものは君が御代
忠義の旗をふりかざし
唯一筋に國のため
過ざし普佛の戰に

熊本城を囲みけり
古今無双の豪傑で
桐野篠原村田など
慄悍決死の烈丈夫
何れをとらぬ薩摩武士
天地も崩るゝばかりなり
裂るためしのあらバとて
城の中なる官軍は
死を視る歸する如くにて
進みすゝんで防戰す
護士の城の降りしは

長く青史を汚したり

千早の城の楠公か

谷少將を始とし

家をも身をも打忘れ

此時都の方よりは

多くの官軍出陣す

空飛ぶ鳥のそれならで

城中城外もろともに

折柄たけき若者が

單身劍を提さげて

蟻のはい出る空もなき

それにいあらで城中は

睢陽城の張巡か

下も兵卒に至るまで

一心不乱に防戰す

錦の御旗ひるがへし

されども城の連絡は

翼なければ通ひ得ず

音信する由なかりけり

國の爲めとて健氣にも

城を出でつゝ夜に乘じ

賊囲の中を潜り出で

都の軍に身を投じ

語りつ問ひつ示しあい

爰に始めて連絡の

池中の魚も時を得て

進め〳〵の号令に

西北南東なる

空前絶後の功を立て

我日の本のますらをゝ

譽め羨まぬ者ぞなき

此邊數句何等の快筆何等の老筆恐るべし恐るべし紙上亦号令の激揚なるを聞く

城の中なる有樣を

賊兵原を打破り

解けて嬉しき厚氷

跳る心の活潑地

萬銃天地に鳴り響き

囲の賊をうち攘ひ

名を揚げ父母を顯せし

譽め羨まぬ者ぞなき

壹の暑さはゆふ立に
かゝかく月に置わたす
玉を欺く玉だれの
いとも涼しきむら竹の
疑ふバかりおと細く
千ひらの金と一刻を
猶明け易き夏の夜の
口さがなくも愚かにも
蚤蚊や蠅と打つけに
おもひを焦す螢火や
しのぶ軒端の橘に

二百十

あらひ流して峯高く
千草の雪のはら〳〵と
小簾の返しに吹ちりて
葉越に秋や來ぬるかと
庭の筧もきこゆなり
惜みし春の宵よりも
價を誰かさだむべき
夏いうるさし又暑し
貶していふはいいずして
昔の人の袖の香を
はつねをもらす郭公

熊本籠城ノ圖

雜筆自如何等意氣何等風神

訪ふ人もなき草の戸を
物の哀れをゆめにだに
靜かに觀れバ四ツの時
われを慰め樂します
今目のあたり覺えたる
つゝむとすれど夏衣

見二燭蛾一有レ感

時しも夏のやみの夜に
東の窓の其もとに
涼しき風を送り越し
いと美しき蝶々の
叩く水鷄にやぶらるゝ
しらで寐過す人ならん
うつり變りて物ごとに
深き方便をゆくりなく
其嬉しさと樂しさよ
吹返したる峯の松風

犬山居士

文書かんとて我庵の
燈ともせバ庭の木の
衣を通し吹くにつれ
飜めき來り燈みて

取らまくぞする有様を
深く心に藏め置き
抑も難を介だつハ
又其本を見ざりせバ
等しき業やなすならん
取まくするは愚ならぞや
なさまくするハ愚なり
其身失せては遂ゞたし
しめて其身の燒もせず
進みて後にはまれ得て
名譽の人と呼バヽれん

見れば悟の有そ海
守らんとする事ぞある
惡きことにはあらねども
今しも來りし蝶々の
燒ても思ふ其火をバ
死しても難き其事を
其身ありてぞ事遂ぐる
されバ撓まぬ心をバ
死しもなさぬ道をとり
後に鑑を殘すべき
名譽の人と呼バヽれん

金言々々
結ひ得て妙

二百十二

碌々庵居士曰、叮嚀訓誡之意、句々莫レ不レ顯、使レ人不レ覺切齒、

全篇鏘然
擧有聲。

ロングフェルロー氏人生の詩　、山仙士

そも靈魂の眠るのハ
人の一生夢なりと
眠らにや夢ハ見ぬものぞ
夢と思へどさにあらぞ

死ぬといふべきものぞかし
哀なふしでうたふなよ
此世の事ハ何事ぞ

人の一生夢ならず
人の終は墓なくも
土より來り又土に

最とたしかなる事ぞかし
墓にうづまるものならず
歸ると云ふハ肉体ぞ

二百十三

そりや靈魂の事ならず

此世に在りて樂むも
世にある趣意よあらざらん
日毎〳〵に怠たらず
功を立ねばならぬぞよ

光陰實に箭の如く
心ハ如何に猛く共
送葬大鼓打つ胸ハ
最とも哀にひゞくらん

又苦しむも固と人の
生るハ役に立つ爲ぞ
今日ハ今日だけ一日の
藝道いとも易からぞ

墓なく進む葬禮の
音止められたる大鼓の音

青葉典麗

此世の中ハ戰爭ぞ
人に生れた甲斐もなく
あゆむ羊や牛たるな
功名手柄なすべきぞ

其戰爭の中に居て
人に使ハれ追ハれつゝ
人に劣らぬ憎發し

如何よ樂しくおもふ共
如何にうれしくありつ共
働くべきハ現在ぞ
胸の心と天の神

未來ハあてにすべからず
過去ハむかしに過ぎし事
其の働を見る者ハ

豪傑鼈の一生を

生きて甲斐なきものならず

稀なる譽得るならば

永く傳へて殘るらん

其香しき名を聞かバ

艱苦辛苦を浪風よ

助け船さへあらぬ身の

功名遂ぐる者あらん

されバ人々怠たるな

つら〳〵思ひめぐらせバ

人に勝れし手柄して

名ハ香しく後の世に

社會の海に乘り出して

吹き廻ハされて破船して

氣を取り直し憤發し

暫時も猶豫するなかれ

心を落すことなかれ

功名手柄なしつゝも

運命如何につたなきぞ

たゆまず止まず自若として

勤め働くことをせよ

碌々庵居士曰、讀去不レ覺擲レ卷、罵レ吾笑レ吾者、三四而不レ止、又曰、每段說二破人情一其巧天然恐非二人造一也乎

日本刀の歌

大庭景

氷か雪かはた霜か

光りも寒く又凄く

實にも貴き日本刀

水より清く潔よく

凛然萬古に輝きし

世界に類ひなかりけり

百練千磨の功を經て
忠魂義膽は鉄壁の
動かぬ君が大御代と

抜けばきらめく青蛇の尾
霜雪飛す心地よさ
日本刀の切れ味ぢい

我國勇氣の存亡は
此の寶刀のなかりせば
實にぞ貴き日本刀

きたい出せる丈夫の
城より堅き頼母しさ
世界に類ひなかりけり

揮ひ來れば烈日に
姦臣賊子を打倒す
世界に類ひなかりけり

此の寶刀に因るぞかし
大和魂ひ地に墜ちむ
世界に類ひなかりけり

二百十八

碌々庵居士曰、日本刀之鋭利尊嚴、與二本篇之飾玉裝錦一、腐辭不レ可二以評一、

人の東都に之くを送る　　楢山居士

木梢を鳴らす秋風に
壯士を送る易水の
國と民との爲めなれば
墳墓の土地を跡に見て
土地を故郷となしつゝも
尺取虫の暫し間い
風雨あらき折あらば
自由權利を保護しつゞ

一たび去て還らざる
昔も今も變らざる
身をも命も顧みぞ
都といへど住馴ぬ
螢の机雪の窓
時を松ケ枝歳寒の
國と民との傘となり
假令太夫の封得ぬも

二百十九

常盤の色の變らざる
利祿の霜に凋むなよ
行けよ行け〳〵疾く行きて
あづまに花を咲せつゝ

礒々庵居士曰、字少意多、殆如レ讀二大篇一、又曰、末之
一句、重千鈞、

題明治乙酉攝河二洲洪水　一山居士

古來天變地異の爲め
兄弟妻子も離散して
口碑歷史にいと多く
其慘狀をまのあたり
蒼生塗炭の苦に沈み
老幼飢寒に死せしと
聞くさゑ寒きに汗すなる
目擊しなば如何ぞや
況して自ら其害に
遭ひつる人ゝ如何ならん

茲に物する一吟ゝ
攝河二洲に跨がれる
明治十又八年の
月ゝ六月日ゝ十五
洪水被害の事蹟なり
曉日漸久晴れ遣らず
俄かに盆雨降り出でゝ
牧方地方淀川の
遂に其の十七日に
流れも急に堤防を
水嵩さ增すこと十五尺
溢れし水ゝ箭の如く
一衝忽ち破潰して
見る間に近傍村落の
龍憤虎怒も啻ならず
或ゝ家屋を破りつゝ
或ゝ田圃を洗ひさり
低地に到り留まりて
又去るべくもあらざれゞ

凋むなよの五字一篇の眼目と云ふべきか

起首能く冒頭其体に適す

轉じ得て妙

實況々々

斯くて八果じと晝夜なく
破堤を修め溜水の
二十九日の事なりき
北風さへも添ひければ
忽ち波の荒ら立ちて
初めの浸地ハ言ふも更
十に八九ハ水底に
桑田變じて海となる
一圓全く沈み果て
影も形も水のそこ
恰も琵琶湖を見る如く

公私諸共颯精し
疎通を謀る其中に
又も車軸の雨降りて
過半竣へし其効も
再び堤を毀ち去り
四區十郡の町村ハ
沒せられざる所なく
中にも茨田郡内ハ
家屋森林皆共に
うへを漩瀾の走るなど
其のものすごき中に居て

以下慘狀可想

樹木や屋根によもすがら
蛭蛙と枝を爭ひつ
最早救ひの船や來ん
風に向へる燈火の
細き心を勵まして
親ハ東に子ハ西に
浮きつ沈みつ流れゆく
遠くなり又近くなる
泣けど叫べど片便り
知るに由なき九死中
底の藻屑となるもあり

露の命を繋ぎつゝ
風や止みなん水去らんと
神や佛の助けんと
夫よりも最と危くも
夫とハ屋根に妻ハ枝
夏尚は寒き水の面に
身ハ浪花江の捨小舟
鳴海潟なる濱千鳥
遂に互ひに生死さへ
わづかに一生得るもあり
其慘其悲拙吟の

もとより盡すべきならぞ
就て無形の實を推せ
實に七百五十三
戸數ハ七萬二千强
其中死傷七十餘
一時救助を仰ぎたる
流れし橋ハ六十餘
其外社寺や學校や
流失破損尙は多く
この文明の乾坤を
是か將た非かと世の人の

たゞ左の形ちあることを
水に浸りし町村ハ
田園一万九千町
人口凡そ三十万
生死知れざる二三十
貧民七万餘人あり
破損ハ凡そ三十許
戸長役場や堤防の
近古稀れなる洪水の
斯く傷ふハ天道ハ
怪むも實に理りや

古代のノアを喚び起し
果して驚死せしならん
不意の天災なれバなり
金城内にありし儘
思ひ出せバ今も尙は
此慘狀を不知火の
又後の世の紀念にも
尾の長々と概畧を

未句隱而雅

碌々庵居士曰、句々活潑、恰如洪水之壓二一洲一、又如三漏船之走二水上一、

新体詩歌選終

此災厄に遭ハしめば
蓋し其害輕けれど
居士ハ其頃浪花なる
坐がら實地を目擊し
肌に寒を覺ふなる
四方の人にも知らさるや
成さんものとて山鳥の
記臆の儘に賦すになん

明治廿年二月廿一日出版御届
同　年四月　　刻成出版

編輯人　廣島縣平民　佐藤雄治
大阪府東區島町二丁目拾番地寄留

印刷人　大阪府平民　田中松市
大阪府下東區安土町二丁目廿七番地